ISSN 2186−0645

富山市埋蔵文化財調査報告62

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅻ

—小竹貝塚(おだけかいづか)—

2014

富山市教育委員会

ISSN 2186−0645

富山市埋蔵文化財調査報告62

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅻ

—小竹貝塚(おだけかいづか)—

2014

富山市教育委員会

例　言

1　本書は、個人住宅建築に先立ち平成20年度に実施した小竹貝塚の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は富山市教育委員会が実施した。費用については富山市教育委員会が国庫補助金・県費補助金の交付を受けた。

3　調査の期間、発掘面積、調査担当等は次のとおりである。

発掘調査　平成21年2月2日～平成21年3月27日　発掘面積173.44㎡

調査担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員 鹿島昌也

主任学芸員 小黒智久

同　嘱託　長谷部真吾　宮崎琢也

出土品整理・報告書作成　平成25年8月2日～平成26年3月31日

担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　主査学芸員 鹿島昌也

同　嘱託　納屋内高史

4　本書の執筆は、埋蔵文化財センター職員の協力を得て、鹿島・納屋内・宮崎が行い、各々の責は文末に記した。

5　報告書作成にあたり、町田賢一氏よりご助言を賜った。記して謝意を表します。

6　出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。

7　平成20年度に刊行した、富山市教育委員会2009『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ－水橋上砂子坂遺跡・小竹貝塚』富山市埋蔵文化財調査報告33と本書との内容が異なる場合には、本書に掲載された内容をもって正式な報告とする。

凡　例

本書の挿図・写真図版等の表示は次のとおりである。

(1) 方位は真北、水平基準は海抜高である

(2) 座標は公共座標（世界測地系第Ⅶ系）を使用した。

(3) 遺構の表記は次の記号を用いた。

ＳＫ：土坑、Ｐ：ピット、ＳＸ：谷地形・竪穴建物

目　次

第Ⅰ章　調査の経過・・・・・・・・1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境・・・・・3

第Ⅲ章　調査の概要・・・・・・・・6

第Ⅳ章　総括・・・・・・・・・・・・27

参考文献

写真図版・・・・・・・・・・・・・・30

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・38

発掘調査区遠景（北から）

発掘調査区遠景（東から）

カラー図版2

調査区完掘状況（上が南）

調査区完掘状況（東から）

谷地形遺物出土状況（X78, 580 ～ 78, 582・Y350 ～ 307 付近、西から）

谷地形からの出土遺物

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

小竹貝塚は、富山市呉羽町北～高木地内に位置する縄文時代前期を主体とする貝塚遺跡である。貝塚の所在は、昭和20年代頃から知られており、過去には試掘調査・発掘調査が複数回実施されている。これらによって、小竹貝塚の貝層は東西50ｍ、南北150ｍに広がり、日本海側最大規模とされている。昭和33年には高瀬保氏、昭和39年には岡崎卯一氏らの調査で縄文時代前期の貝塚であることが分かった。遺跡は昭和40年文化財保護委員会刊行『全国遺跡地図（富山県）』に登載され、昭和47年3月発行の『富山県遺跡地図』や平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』では埋蔵文化財包蔵地として周知されている。また、同時期に富山県教育委員会が実施した北陸新幹線建設に伴う分布調査で遺跡範囲はさらに拡張された。現在では、平成25年3月発行『富山市遺跡地図』（市 No.2010096）に登載され、遺跡面積は約53,000㎡である。

また、遺跡の中央を貫通する新鍛治川承水路での採集活動や富山考古学会員による貝層試料の分類作業、自然科学分析等によって遺跡の概要が明らかになってきている（山内ほか1993）。

平成20年からの新鍛治川改修工事に伴う富山市教育委員会（以下市教委と略す）による立会調査などで、昭和45年に富山県教育委員会の調査で見つかった貝層を再確認し、県教育委員会の調査で頭部を欠く人骨が1体発掘されていたが、新たに2体の人骨を発掘した。

平成21年から22年にかけて県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所による北陸新幹線建設に先立ち1,280㎡が発掘調査された。その結果、前期前葉～末葉にかけての最大厚2ｍを測る貝層が発掘され、91体の埋葬人骨や16体のイヌ骨、竪穴建物や丸木舟を利用した作業足場などが発掘され、日本海側最大級の貝塚の実態が明らかになってきた（県財団2014）。

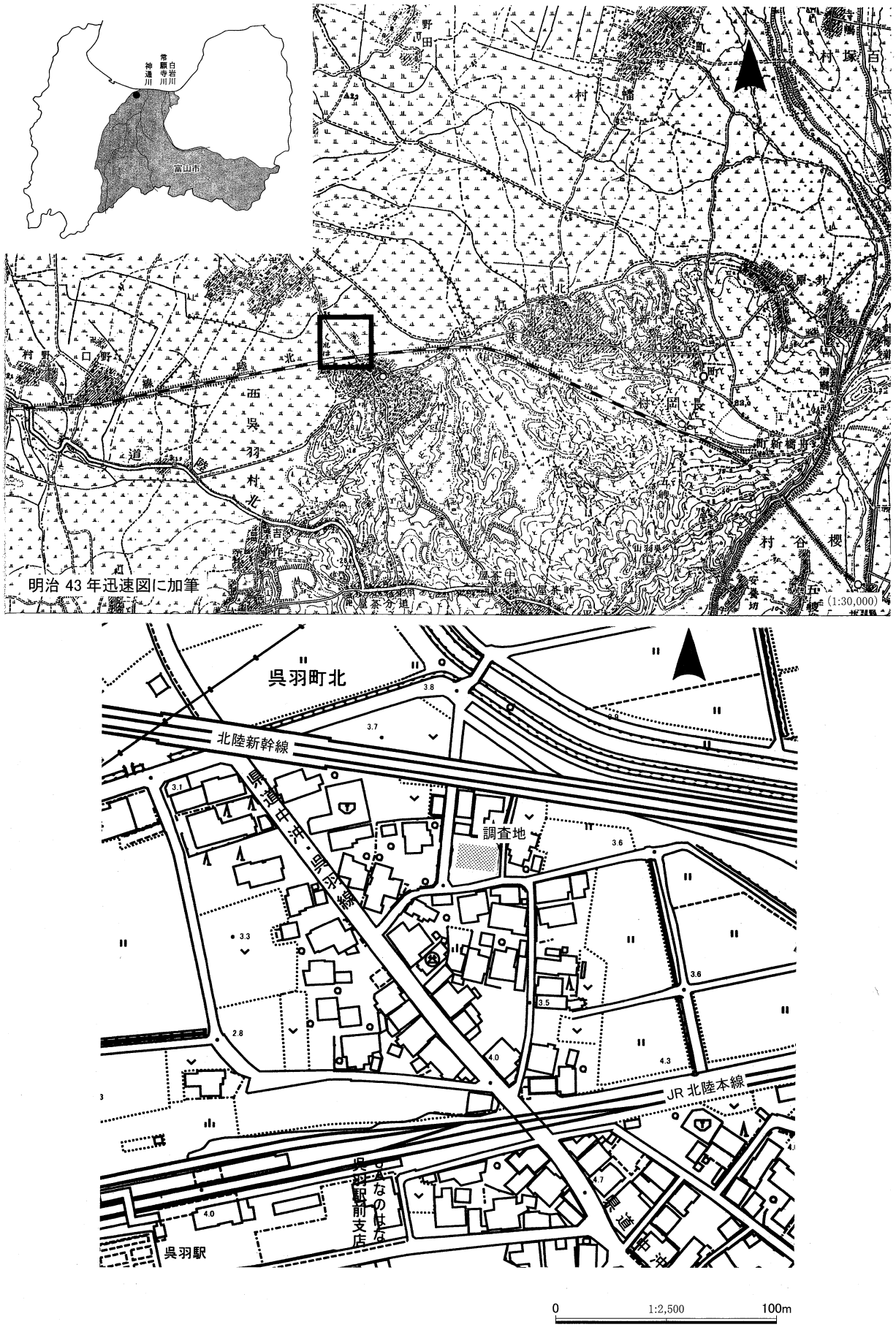
平成20年7月24日、北陸新幹線建設に伴う移転による個人住宅建設に先立ち、埋蔵文化財所在確認についての照会がなされた。建設予定地全域387.34㎡が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、同年9月11日に市教委による試掘調査を実施し、調査対象地全域に遺跡の所在を確認した。調査では縄文時代の溝、土坑、弥生時代の土坑、ピット等を検出し、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、石製品（凹石、磨製石斧）が出土した。

この調査結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、宅地部分の地盤改良工事及び擁壁の掘削工事が遺構面に達することから、宅地部分と擁壁部分173.44㎡について発掘調査を行うこととなった。

発掘作業は平成21年2月2日から3月27日まで行った。表土掘削は2月2～3日にバックホウを用いて行った。表土除去完了後の2月4日から人力による包含層掘削及び遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。

遺物整理・概要報告書作成作業は、現地調査と並行して平成21年3月31日まで行った。

平成25年度は、平成20年度に実施した現地発掘作業で出土した約50箱について出土品整理及び報告書作成作業を実施した。（鹿島）


富山市
白岩川
常願寺川
神通川
明治 43 年迅速図に加筆
(1:30,000)
呉羽町北
北陸新幹線
県道中老・呉羽線
調査地
JR 北陸本線
呉羽駅前支店
呉羽駅
0
1:2,500
100m

第1図　調査位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

小竹貝塚は、富山平野の中央を南北に走る呉羽山丘陵の北端に広がる長岡台地の裾部から平野に至る沖積地、標高3.5ｍに立地する。富山市街地からは北西へ約４ｋｍの距離にある。現在は海岸線より約４ｋｍ内陸に位置するものの、約6,000～5,000年前の縄文海進の際に平野部まで広がっていたとされる旧放生津潟の縁辺に貝塚が形成された。呉羽山丘陵・旧放生津潟一帯は、旧石器時代から近世まで200か所にものぼる遺跡が所在し、富山市域の約３分の１が集中する遺跡の宝庫でもある。

第２節　歴史的環境

縄文時代前期には、小竹貝塚の東約750ｍに、ほぼ同時期に形成されたとされる淡水産の貝を主とする蜆ヶ森貝塚が形成され、縄文時代前期の海進期には旧放生津潟が遺跡近辺まで入り込んでいたと推測される。中期には、長岡台地上に集落が多く出現し、中でも国史跡の北代遺跡は拠点的な集落で前葉から末までに約70棟以上の竪穴建物や数棟の掘立柱建物群が確認されている。北代遺跡の北西300ｍにある北代加茂下Ⅲ遺跡では前葉から中葉に小規模な集落が形成され、北陸では初となる柱列が二重に巡る形態の掘立柱建物跡が確認された。後期から晩期にかけては、長岡台地の北寄りに遺跡が分布するようになり、後期には長岡杉林遺跡から単独で竪穴建物が検出され、晩期には北代遺跡で掘立柱建物や墓地とみられる土坑、粘土採掘坑が検出されている。長岡八町遺跡では掘立柱建物や大型の土偶がみつかっており、中核的な集落が形成されていたと推定される（富山市教委2004）。

弥生時代中期～古墳時代前期にかけては、海岸線に近い江代割遺跡・四方荒屋遺跡で大規模な集落が形成された。打出遺跡では、弥生時代終末期の焼失住居を含む集落がみつかっている。呉羽山丘陵北西の沖積地に所在する八町Ⅱ遺跡では、古墳時代前期から中期にかけての集落跡が確認されている。一方、呉羽山丘陵にはほぼ全域に古墳群が所在しており、呉羽山丘陵北端には、近年の調査で百塚遺跡や百塚住吉遺跡から弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓・古墳群がみつかった。さらに初期の古墳群である杉坂古墳群や中期には前方後円墳である古沢塚山古墳が築かれ、後期においては番神山横穴墓群が確認されている。また、丘陵南西部には弥生時代の方形周溝群をはじめ、山陰地方との交流を示す四隅突出型墳丘墓を有する杉谷古墳群が築かれる（富山市教委2008）。

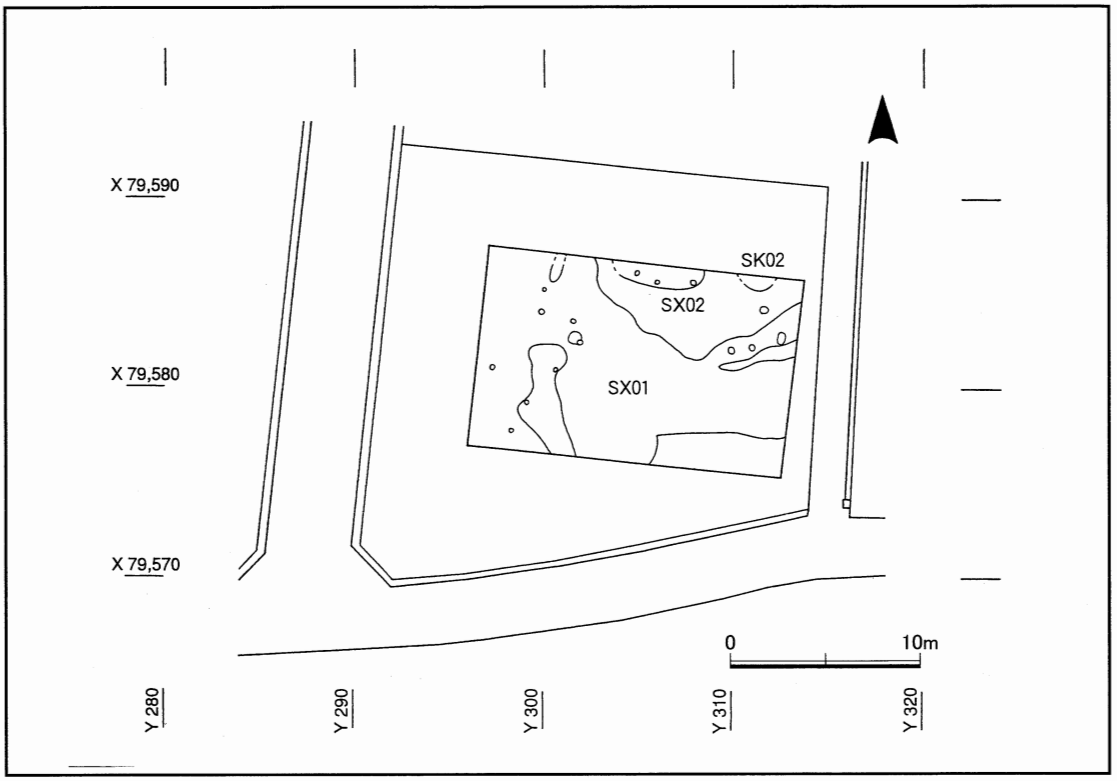
奈良時代から平安時代にかけ、長岡台地では墾田開発に伴う集落が一気に増加する。北代遺跡では、奈良時代を中心に竪穴建物や鍛冶工房等が検出され、呉羽小竹堤遺跡では奈良～平安期の大型掘立柱館建物をもつ集落に鍛冶工房が伴っており、農村集落的側面の強い遺跡が確認できる。一方で、北代遺跡に隣接する長岡杉林遺跡では、平安時代中期の祀堂と推測される建物が検出された。瓦塔、緑釉陶器（椀・火舎）、灰釉陶器（椀）など仏教的色彩の強い遺物が出土しており、仏堂をもつ中核的な開墾集落と推定されている。これらの背景として射水郡寒江郷との関連が注目される。

中世では八町Ⅱ遺跡がある。鎌倉時代から室町時代にかけての集落跡からは掘立柱建物跡や井戸跡、畑跡などが確認されている。この八町地内を含む呉羽町、北代一帯は南北朝時代に京都下鴨社の神社領「寒江荘」に該当することから、荘園内の中核的な集落であったと推測される。また、現専龍寺を中心とした真言宗北代極楽廃寺の成立があり、周辺には数多くの中世石造物の分布が確認されている。

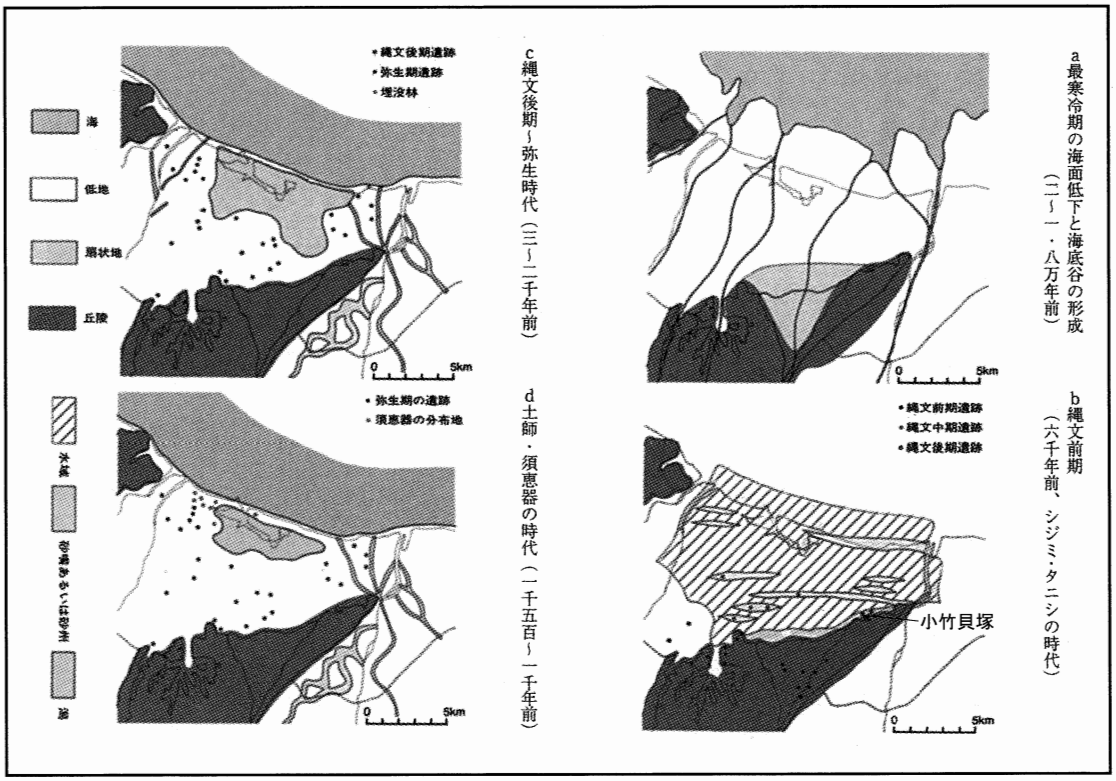
（宮崎）

1 小竹貝塚　2 蜆ヶ森貝塚　3 呉羽町北遺跡　4 北代中部Ⅱ遺跡　5 北代中部Ⅰ遺跡　6 高木西遺跡　7 高木中坪遺跡　8 呉羽町坊ヶ口遺跡
9 高木南遺跡　10 大塚南遺跡　11 大塚遺跡　12 呉羽本郷遺跡　13 呉羽野田遺跡　14 八町西Ｂ遺跡　15 八町西Ａ遺跡　16 利波遺跡
17 四方沖海底遺跡　18 打出遺跡　19 四方西野割遺跡　20 四方北窪遺跡　21 江代割遺跡　22 四方荒屋遺跡　23 四方背戸割遺跡　24 今市遺跡
25 寺島館跡　26 百塚住吉Ｄ遺跡　27 八ヶ山Ａ遺跡　28 八町Ⅱ遺跡　29 八ヶ山Ｂ遺跡　30 八ヶ山Ｃ遺跡　31 百塚住吉遺跡　32 百塚遺跡
33 八ヶ山遺跡　34 富山藩主前田家墓所　35 杉坂古墳群　36 長慶寺古墳　37 市史跡五百羅漢　38 長岡八町遺跡　39 北代加茂下Ⅲ遺跡
40 北代遺跡　41 北代東遺跡　42 長岡杉林遺跡　43 呉羽富田町遺跡　44 北代村巻Ⅴ遺跡　45 極楽寺廃寺　46 北代中尾遺跡　47 茶屋町遺跡
48 北代西山Ⅱ遺跡　49 呉羽小竹堤遺跡　50 呉羽三ッ塚古墳　51 山寺谷Ⅰ遺跡　52 山寺谷Ⅱ遺跡　53 小竹遺跡　54 小竹源平山窯跡

第2図　小竹貝塚と周辺の遺跡(1:30,000)



第3図　調査地位置図



第4図　射水平野の古地形変遷（藤井1964, 2000より一部加筆）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

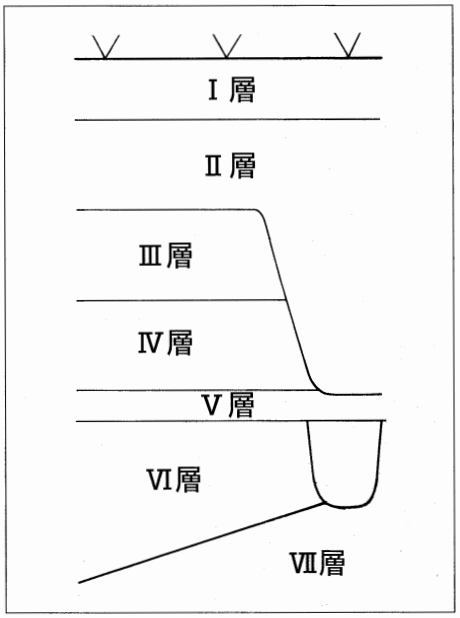
掘削作業と平行して遺構の計測・図化作業を実施した。平面図はトータルステーションによる計測を基本として1/20で作成し、必要に応じて1/10の微細図を併せて作成した。計測は測量機器（トータルステーション）を用いて図面記録を行い、公共座標（世界測地系）を使用した。写真撮影は必要に応じて随時行い、白黒35㎜、カラー35㎜フィルムに記録した。平成21年3月19日にＲＣヘリによる全景写真を撮影した。

第２節　基本層序

基本層序は上からⅠ層～Ⅱ層は表土や宅地造成土、Ⅲ層に旧耕作土が部分的に残存する。Ⅳ層～Ⅴ層は遺物包含層で、Ⅵ層に北西方向に傾斜する谷地形の覆土がみられ、この谷の埋土を掘り込んで、弥生時代後期以降の遺構が形成される。Ⅶ層は淡灰白色の地山である。

現地表面の標高は平均3.5ｍである。調査区内の谷地形の最深部の標高は1.89ｍを測る。

Ⅰ層：表土・造成土（厚さ約20㎝）
Ⅱ層：造成土（厚さ約30～100㎝）
Ⅲ層：旧耕作土（厚さ約10～30㎝、暗灰色土）
Ⅳ層：遺物包含層（厚さ約30～35㎝、暗褐色粘質土）
Ⅴ層：遺物包含層（厚さ約10㎝、暗灰褐色粘質土）
Ⅵ層：谷地形覆土（厚さ約30～50㎝、黒褐色粘質土）
Ⅶ層：地山（淡灰白色粘質土）



第5図　基本層序

第３節　調査の概要

第１項　　遺　構（第６・７図、カラー図版３、写真図版１）

遺構は、谷地形（ＳＸ０１）、不明遺構1基、土坑5基、ピット26基が検出された。

SX01（谷地形）　調査区のほぼ全域に広がり東西方向に延びる谷状の窪みを検出した。調査区東寄りは浅く（標高2.37ｍ）、西に向かって傾斜し、調査区北西端（標高1.89ｍ）で深く落ち込む。当初、この谷地形から北東方向に派生する溝（ＳＤ０１）と調査区南西寄りにある土坑（ＳＫ０１）として取り扱っていたが、調査の進捗によってＳＸ０１との新旧関係がないことが判明し、一連の遺構としてＳＸ０１に含めて取り扱うこととした。谷状の窪みは、浅いところで数㎝、谷の最深部では50㎝を測る。調査区東半部では、深さ20㎝足らずの窪みにコンテナ箱にして約50箱もの遺物が出土した。縄文土器や石器、剥片、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、八尾焼、越中瀬戸焼、木製遺物などあるが、大半は、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器である。

ＳＸ０２（竪穴建物） 調査区北壁に接し、調査区外へ続く。東西軸 4.4 m、南北 1.2 m以上を測る。肩部は緩やかに立ち上がり、覆土中から磨製石斧（51）や剝片などが出土しているが、SX02 に伴う柱穴状の遺構（P11）から図化できないが弥生土器の細片が 3 点出土した。概報（富山市教委 2009）で縄文時代前期の竪穴建物としたが、出土品を精査した結果、弥生時代の可能性が高くなった。

ＳＫ０３ 調査区西寄りに位置する。直径 0.7m、深さ 0.15m を測る不整円形を呈する土坑である。覆土中から図化できないが内面に刷毛目を有する弥生土器あるいは土師器の体部破片が出土した。南に寄って掘方が無く地山に打ち込まれるような木柱根が残存していた。周辺に対応する柱穴などが認められないことから、単独で立っていたか、何かを繋ぎ止めておくための杭のような可能性が高い。

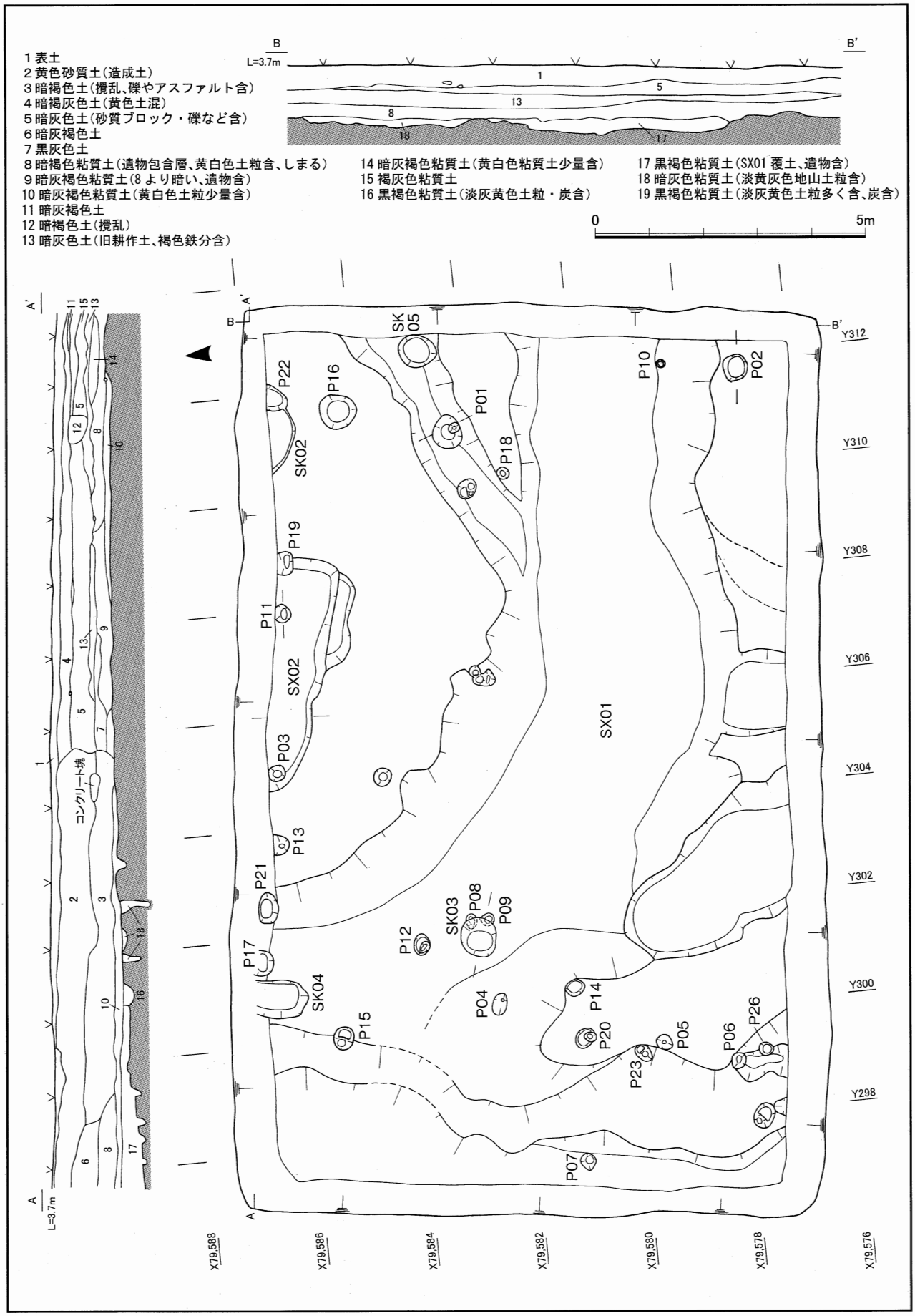
ＳＫ０４ 調査区北西西寄に位置し、調査区外に延びる。覆土中から縄文土器片のみが 4 点出土したことから当該期の遺構と推測される。

Ｐ０１ 調査区東寄りに位置する。楕円形を呈し、覆土中から出土した弥生土器（100）片が約 2m 東に離れた SK05 付近から出土した土器片と接合した。他に弥生土器の破片が出土した。

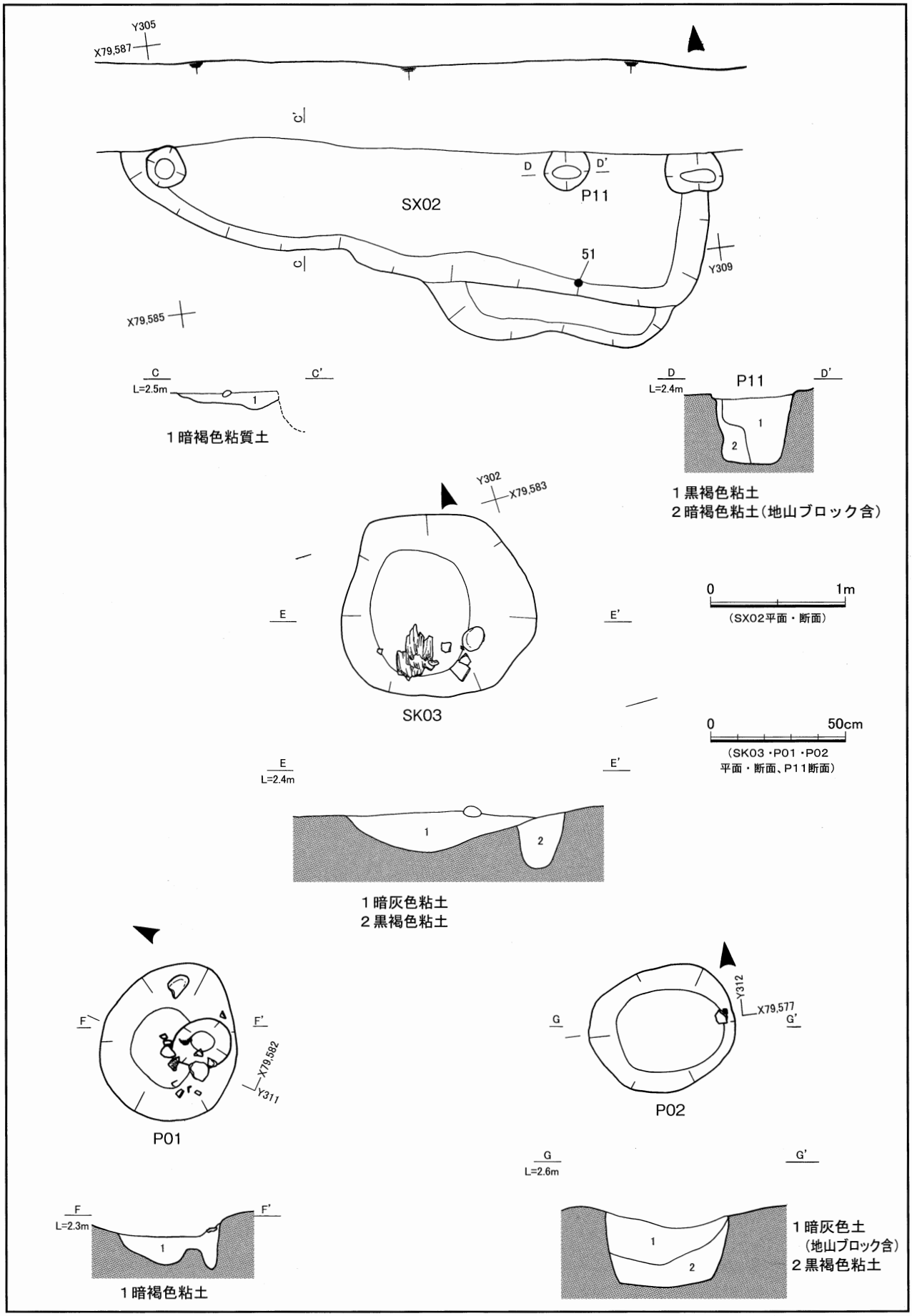
遺構	規模（m）	深さ（m）	備　考	遺構	規模（m）	深さ（m）	備　考
SK02	1.3 × (0.5)	0.11	弥生終末	P13	(径 0.35)	0.46	弥生終末
SK03	径 0.7	0.15	杭	P14	0.38 × 0.3	0.13	
SK04	(0.95) × 0.7	0.3	縄文前期	P15	0.41 × 0.36	0.32	
SK05	0.7 × 0.6	0.45		P16	径 0.65	0.24	縄文前期
P01	0.6 × 0.5	0.1	弥生終末	P17	0.45 × (0.25)	0.37	
P02	0.5 × 0.4	0.25		P18	径 0.22	0.3	
P03	径 0.3	0.24		P19	0.43 × (0.17)	0.2	
P04	(径 0.5)	0.25	弥生終末	P20	0.4 × 0.3	0.28	
P05	0.4 × 0.28	0.34		P21	0.56 × 0.35	0.6	
P06	0.5 × 0.35	0.08		P22	(0.5) × 0.45	0.15	
P07	径 0.27	0.5		P23	0.35 × 0.25	0.35	
P08	0.25 × 0.2	0.23		P24	0.5 × 0.4	0.3	
P09	0.25 × 0.22	0.23		P25	径 0.3	0.44	
P10	径 0.15	0.25	根石・杭	P26	0.35 × (0.23)	0.22	
P11	0.34 × (0.3)	0.25		P27	0.38 × 0.3	0.25	
P12	0.4 × 0.31	0.25		SX02	4.4 × (1.2)	0.11	弥生終末

（表中の括弧は調査区外へ続くもの）

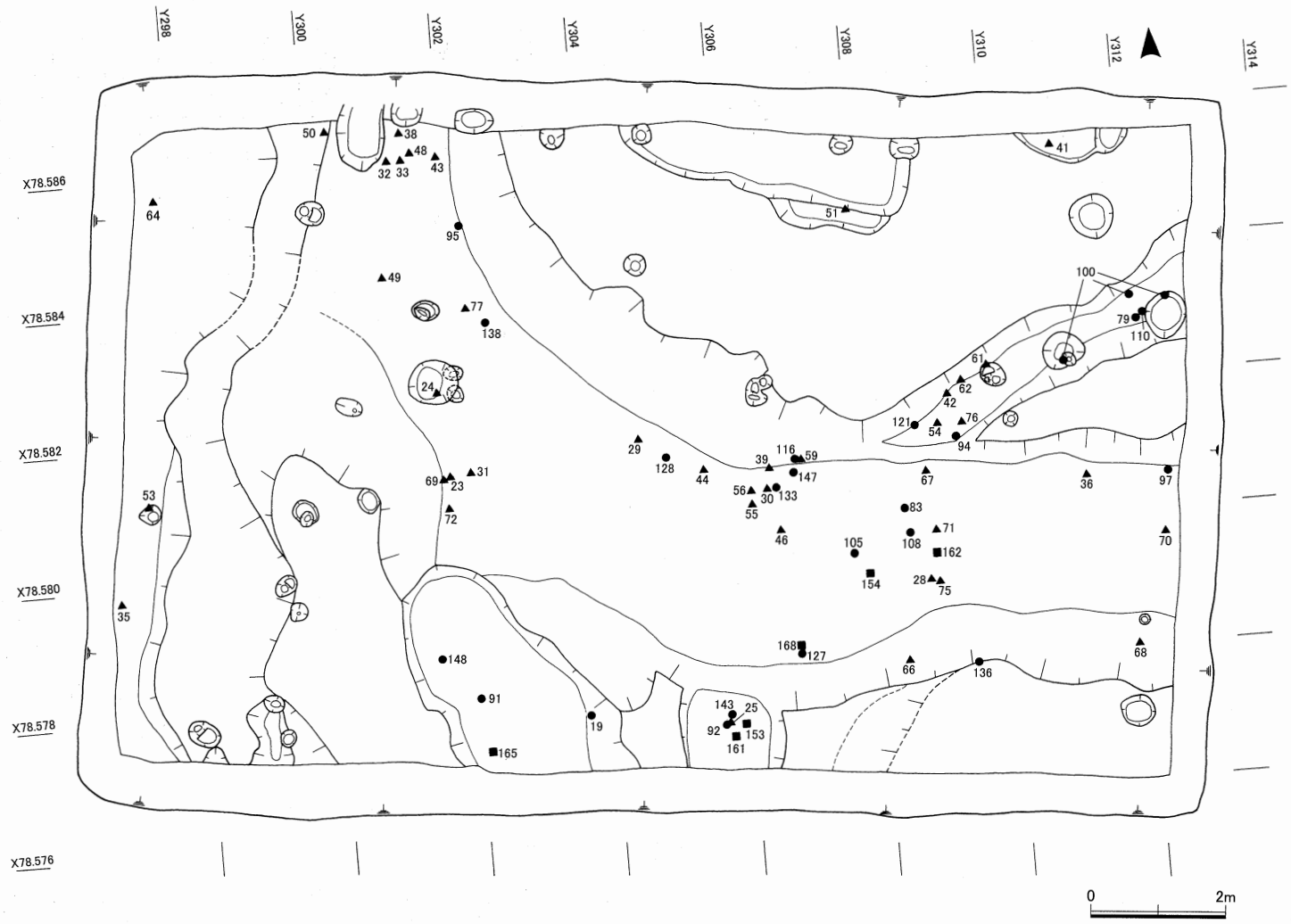
表 1　遺構観察表



第6図　遺構平面図、調査区東壁・北壁土層断面図(1:100)



第7図　竪穴建物(SX02)，土坑(SK03)，ピット(P01，P02)



第8図　遺物分布状況（▲：縄文時代　●：弥生～古墳時代　■：古代以降）

第２項　遺　物（第 9 ～ 19 図　写真図版 2 ～ 9）

１．縄文時代の遺物

縄文土器（第 9 図、写真図版 2）

前期後葉の蜆ヶ森Ⅰ式を中心に、前期後半から後期末の土器が少量出土している。

1、11 は、前期後半の刈羽式併行と考えられる。1 は、外面に平行沈線による格子目文を施す。11 は、外面に縄文を施した上で、深い集合沈線を横方向に施文する。

2 ～ 9 は、前期後葉の蜆ヶ森Ⅰ式の深鉢である。口縁部に粘土紐を貼り付けることにより、2 ～ 3 本の隆線を作出する。2、3 は、隆線の断面形が蒲鉾状で、隆線間の縄文が明瞭に見られることから、小島などの編年でいう古段階に当たる（小島 2008）。4 ～ 9 は、隆線の断面形が三角形を呈し、隆帯間の縄文が不鮮明、もしくは無文であることから、小島などの編年でいう新段階に当たる。また、6 には表面に種子圧痕と思われる痕跡が見られる。

10 は、外面に集合沈線で曲線を用いた文様を施す。文様の形状から、越坂の報告（越坂 1986）で諸磯Ｂ・Ｃ式に類似の土器とされているものと考えられる。また、表面に種子圧痕と思われる痕跡が見られる。12 は、無文地の外面に半裁竹管を用いた爪形文を横方向に施文する。刈羽式や諸磯Ｂ式併行と考えられる。

13、14 は、縄文前期の平口縁の粗製深鉢である。輪積みにより器形を作出した後、更に口縁部内外面に粘土を貼り付けている。そしてその上で、外面に羽状縄文を施文する。製作技法や胎土、復原口径が近似することから、同一個体の可能性が高い。15 は、型式不明だが、縄文前期の土器である。外面に羽状状文が施文されている。

16 ～ 20 は、波状口縁の精製深鉢である。形状や出土位置等から同一個体と考えられる。外面を丁寧にナデ調整した上で、口縁部に沈線を用いて施文する。口縁端部及び文様帯下縁は幅 5㎜ 程度の縄文帯で縁取られる。文様等の特徴から、後期末の八日市新保式の可能性が高い。

21 は、平口縁の粗製深鉢である。口縁部がやや内傾し、外面と口唇部に縄文を施す。前期または中期と考えられる。

22 は、型式不明の深鉢底部である。平底で、外面に縄文を施文する。胎土及び焼成状態から、前期と考えられる。

石器（第 10 ～ 15 図、写真図版 3、4）

磨石を中心に、石鏃、磨製石斧、凹石、敲石などが出土している（表 1）。また、これ以外に石器石材と思われる礫やアスファルトの塊などが出土している。

23 ～ 34 は、石鏃である。出土した石鏃は、ほとんどが凹基無茎鏃であり、それ以外の形態はごくわずかである。凹基無茎鏃は、基部の抉り込みが浅

	P12	P13	P14	SD01	SK01	SK02	SK03	SK04	SK05	SP01	SP02	SP04	SP19	SX01	SX02	包含層	総計
石鏃					1		1							22		1	25
石鏃未製品														2			2
尖頭器														3			3
石錐														4			4
石匙						1								3		2	6
スクレイパー類														4			4
異形石器														3			3
磨製石斧			1	1	1									26			29
磨製石斧未製品														1			1
打欠＋敲打石錘								1									1
打欠石錘														4		1	5
敲打石錘														2			2
磨石				1				1	1	1				47		11	62
凹石														8	1	6	15
敲石														18		4	22
石皿				1										2		1	4
砥石														18			18
玉砥石														1			1
石棒類														3		1	4
玉類（抉状耳飾以外）														7			7
抉状耳飾														7			7
RF														11	1	2	14
剥片		1								1	1	1	1	423	1	31	460
石核														15		1	16
不明	1									1				83		9	94

表１　出土石器集計表

いものと深いもの、中央部が括れるものと括れないものがある。使用石材は、無斑晶質安山岩が最多で、横山真脇石に類似する玉髄も多く見られる。長さ 20 ～ 30mm 前後、重さ 0.5 ～ 1.0g のものが多いが、32 のようにやや大型で厚みのあるものも存在する。32 は石錐の可能性もある。また、33、34 は、平基鏃であるが、基部が窄まる。

35 ～ 37 は、尖頭器である。35 は、玉髄（メノウ）製で、木葉形を呈する。36 は、碧玉（鉄石英）製で、木葉形を呈するが、側縁部などの調整がやや粗く、何らかの刺突具の未製品の可能性が考えられる。37 は、無斑晶質安山岩製で、二等辺三角形を呈し、やや小型である。

38、39 は石錐である。出土した石錐には、つまみ状の頭部を持ち、長い錐部を持つものと、剥片の一端に加工調整を施し、短い錐部を作り出したものが見られる。使用石材は、38・39 のみ玉髄で、他は無斑晶質安山岩である。

40 ～ 44 は、石匙である。出土した石匙は、すべて横型で、特に 40、41 は、整った三角形を呈している。使用石材は、40、41 は玉髄、42 はチャート、43・44 は無斑晶質安山岩で、他に無斑晶質安山岩製のものが 1 点出土している。

45 ～ 53 は、磨製石斧である。出土したもののほとんどは、蛇紋岩類[1)]を用いた定角式磨製石斧である。完形のものは少ないが、48 ～ 53 のような大型で太身のものの他、47 のような細身のもの、45、46 のようなミニチュア品といえるものまで様々な大きさのものがある。また、敲石や凹石に転用されているものが多数見られる。

54 ～ 56 は、石錘である。円礫の長軸端を打欠いた打欠石錘が多くを占めるが、56 のように、縄欠け部を敲打により作出するものも少数ある。300 ～ 600g をはかる大型のものがほとんどである。花崗岩や凝灰岩などを用いているものが多く、また、磨石や砥石、小型の石皿などを転用したものが多数見られる。

57 は、凝灰岩製の石皿である。出土した石皿は、凝灰岩や砂岩を用いているものが多い。

58 ～ 64 は、磨石、凹石、敲石である。出土したこれらの石器には、砂岩や凝灰岩など、軟質で粒子の粗い石材を用いたものが多いが、敲石として用いられているものには、蛇紋岩類を用いているものも見られる。また、これら 3 つの器種が複合しているものが多く見られる。58 は磨石と凹石、59 ～ 61 は磨石と敲石、62 は磨石と凹石、敲石が複合している。63、64 は、敲石である。64 は、敲面が痘痕状を呈しており、石器製作用のハンマーとして用いられた可能性が高い。

65、66 は石棒である。出土した石棒は、両端部が残存しているものはなく、正確な形が分かるものはない。ほとんどが凝灰岩製である。65 は被熱している。

67 は、安山岩製の砥石である。表裏側面に平行する研磨痕が見られ、表面は緩やかな溝状に窪んでいる。

68 は、砂岩製の玉砥石である。表裏両面に、幅 5mm 程度の断面半円形の溝が見られる。

69 ～ 74 は、玉である。69、72、73 は、滑石製の玦状耳飾、70 は滑石製の管玉状のものの破片を更に玉として再利用したものである。71 は、扁平な四角柱状を呈し、上下両面から穿孔している。蛇紋岩類を用いている。74 は、玦状耳飾である。滑石製で、円形を呈する。被熱している可能性がある。

75 は、碧玉（鉄石英）の原石である。多数の剝離痕がみられるが、縁辺は磨滅している。76 は、頁岩製の剥片である。77 は石核である。石材は、横山真脇石に類似する玉髄である。　（納屋内）

---

1) これまで蛇紋岩とされてきた石材に関しては、近年、蛇紋岩のほかに透閃石岩が含まれることが指摘されている（中村 2013）。しかし、両岩石の肉眼での判別は難しく、詳細な分析も行うことができなかったため、今回は蛇紋岩類として一括した。

2．弥生～古墳時代の遺物（第 16 ～ 18 図　写真図版 5 ～ 8）

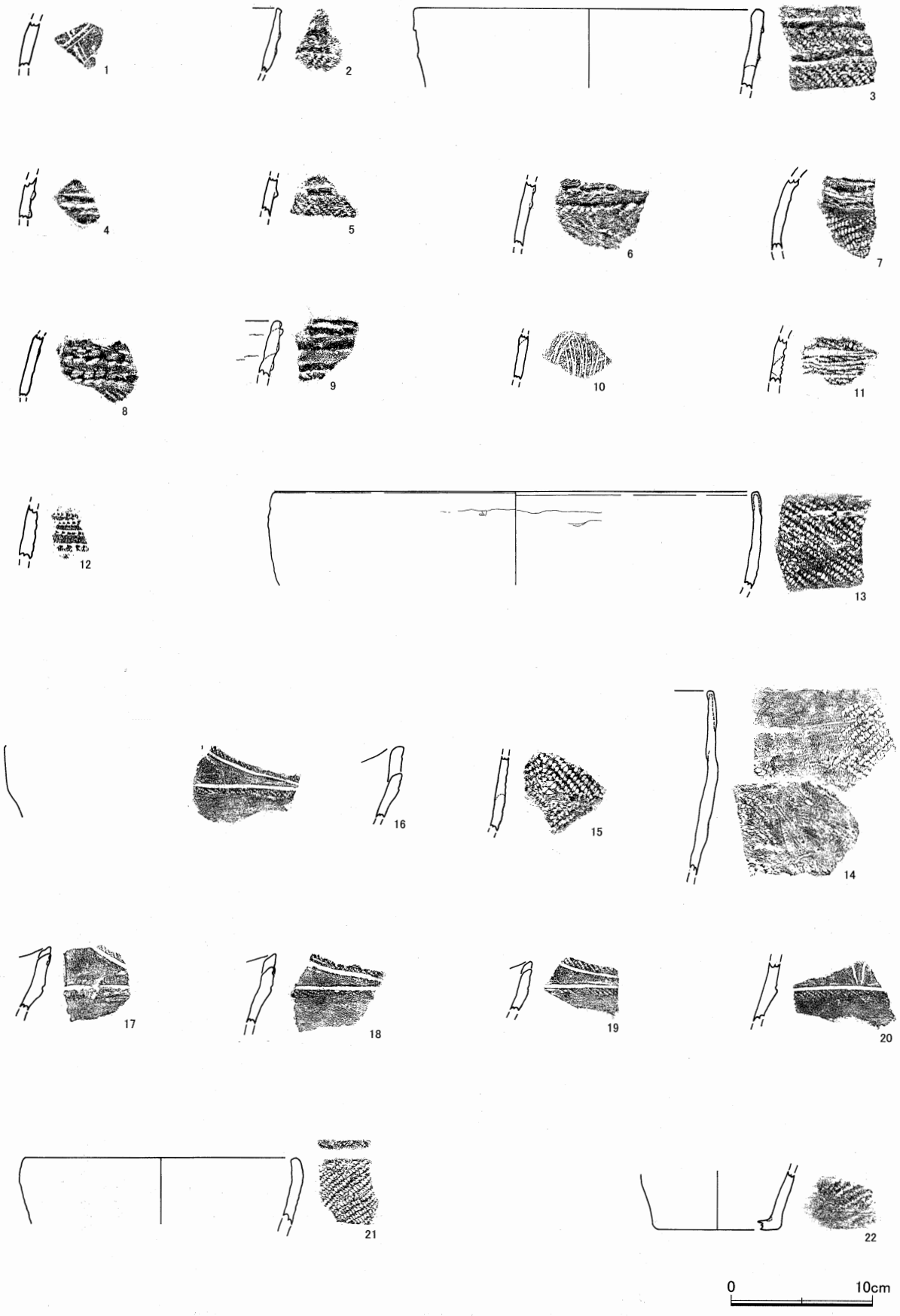
78 ～ 98 は弥生土器あるいは古墳時代土師器の甕形土器・壺形土器の口縁部である。観察表では、弥生土器に区分したが、多くはいわゆる白江式期に属するとみられる。外面に煤が付着するものもあり、実際の煮炊きに使用されたものである。78 は口縁が有段状になる。79 ～ 92 は「く」字状に口縁部を外反させる。79 ～ 83・85・86 は端部を尖らせ外側に面をとる。87 ～ 90・92 は端部を丸くおさめる。93・94 は受口状口縁の壺形土器あるいは甕形土器である。95 ～ 98 は有段口縁壺の口縁部で、95 ～ 97 は口縁が外反気味に開く。97 は内外面に赤彩が施され、端部付近に被熱による黒色化がみられる。99 は直口壺である。100 は広口の壺形土器である。胴部最大径は 27.5 cmを測る。101 は壺形土器の肩部である。102 ～ 114 は弥生土器あるいは古墳時代土師器の甕形土器あるいは壺形土器の底部である。102 は台付甕の底部である。105 の底部は幅の広い輪状になる。115 ～ 117 は古墳時代土師器の小型壺である。いずれも有段口縁状を呈し、115 は外反した端部に面をとる。内外面赤彩されたものもある（写真のみ）。118 は鉢の口縁部である。119・120 は小壺の台部である。121 ～ 127 は蓋形土器である。121・122 は返しが付く。弥生時代終末期～古墳時代初頭とみられる。128 ～ 148 は高杯形土器あるいは器台形土器である。赤彩されるものが目立つ。128 は口縁端部や外面に刻み目を施す。豊田大塚・中吉原遺跡出土の器台に類例がある（富山市教委 2013 a）。器台の杯部が受口状になるもの（130・133）と皿状になるもの（132）がある。弥生時代終末～古墳時代初頭とみられる。観察表では弥生土器と土師器を分けてみた。

3．古代以降の遺物（第 19 図　写真図版 8）

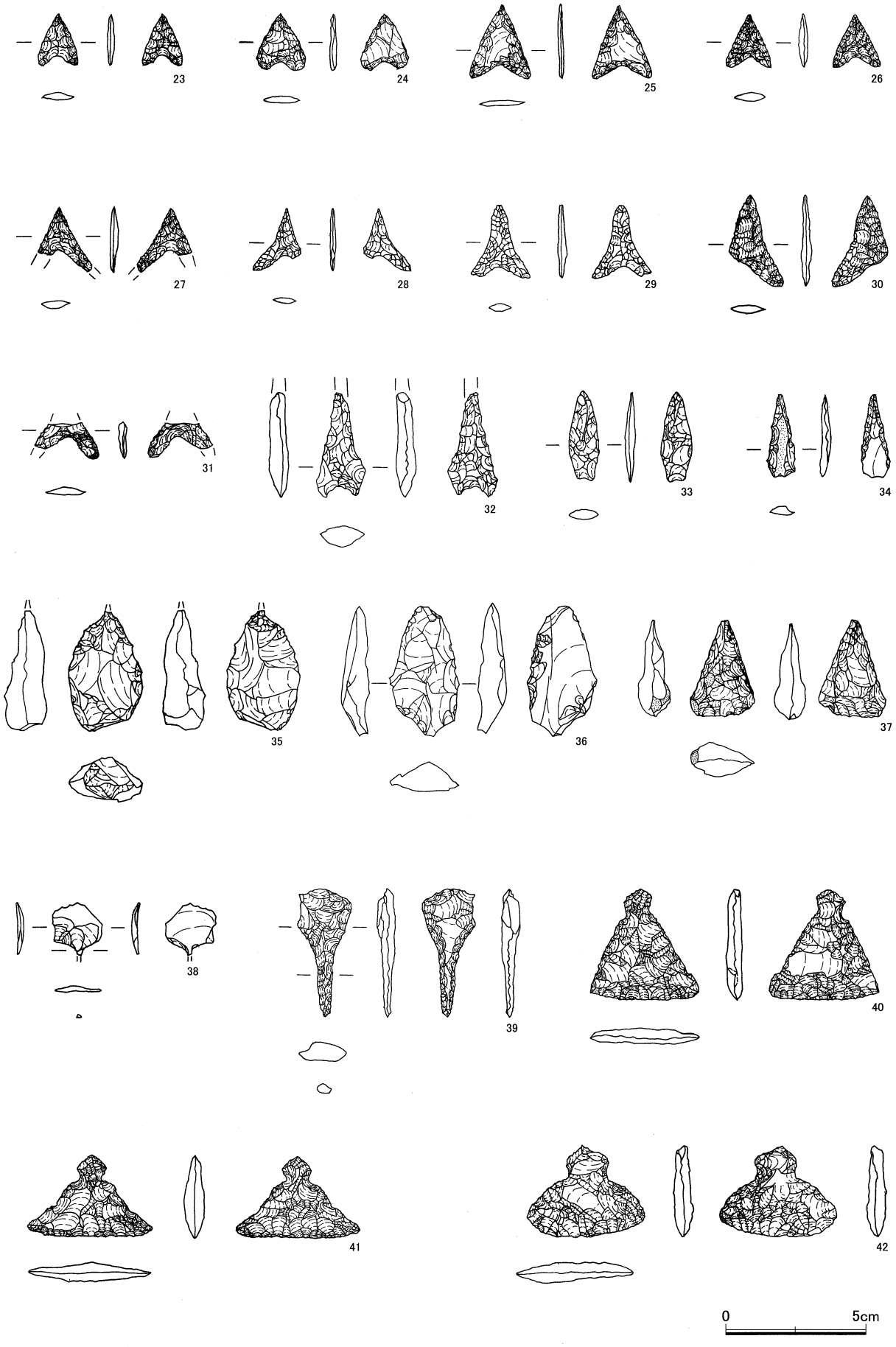
149 ～ 156 は須恵器である。149 ～ 151 は杯 B 蓋である。149 は口縁端部が肥厚して丸くおさめる。150 の口縁端部を垂下させ外側に面を持つ。150・151 は頂部付近にロクロ撫で後、回転ヘラ削りを施す。152・153 は杯 B 身である。152 は底高台貼り付け痕が明瞭に残り、底部外面ヘラ切り後未調整である。153 は底部外面をヘラ切り後ナデで仕上げる。154 は杯 A である。底部外面中央付近は回転ヘラ切り後未調整である。156 は壺の胴部である。須恵器は 8 世紀後半～ 9 世紀初頭とみられる。157 ～ 161 は珠洲焼である。157 は甕の肩部である。外面に平行叩打痕が残る。158 は壺の肩部とみられる。外面に綾杉状に叩打し、体部を多面体状にしたものである。159 は甕の胴部片である、160 は片口鉢の口縁部である。端面を平直に仕上げる。吉岡編年Ⅲ期（吉岡 1994）。161 は片口鉢の破片を直径約 3 cmの円形に加工し、双六か囲碁の碁石として転用されたものである。162 は八尾焼の甕口縁部とみられる。口縁部が受け口に内湾して立ち上がり、口が狭い壺状になる。酒井分類の甕 B（酒井 1990）。163・164 は越中瀬戸である。

4．その他の遺物（第 19 図　写真図版 8）

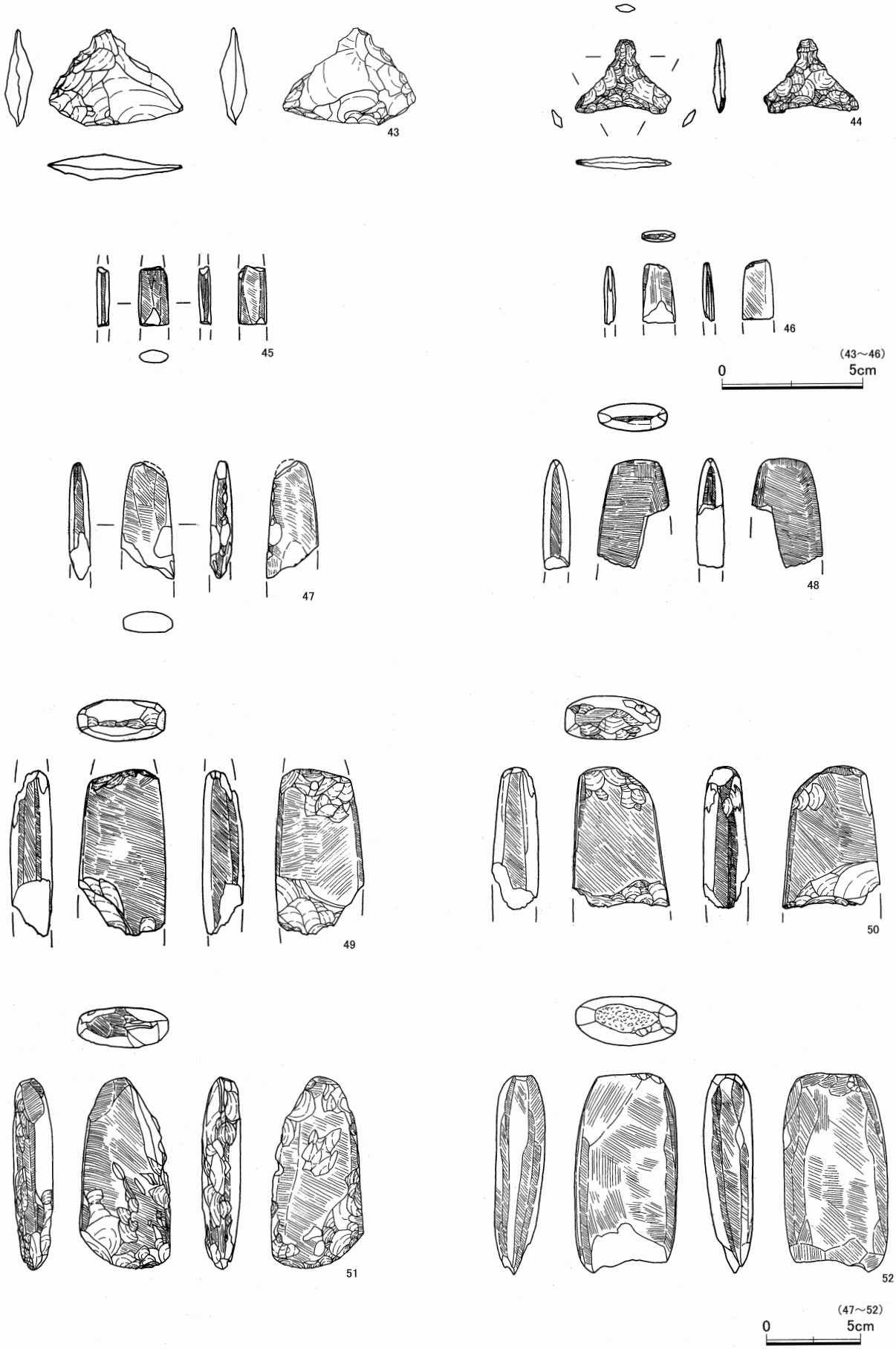
165 は土師質の紡錘車である。166 は泥岩製の硯あるいは砥石、167 は粘板岩製の砥石である。168 は金属製品の切羽である。長さ 3.6 cm、最大幅 1.8 cmを測る。長さ 1.8 cm、幅 0.8 cmの孔があけられる。ほかに、モモあるいは梅の種子（核）とみられるものが 23 点、不明種子が 1 点ある。一方、加工された木製遺物も複数出土したが腐食が進んでおり、取り上げの際に原形を保つことができないものがほとんどで、図化できていない。大足のような形状をした板状木製品や藁打ちの形状をした木製品などもみられた（富山市教委 2009　図版 15）。（鹿島）



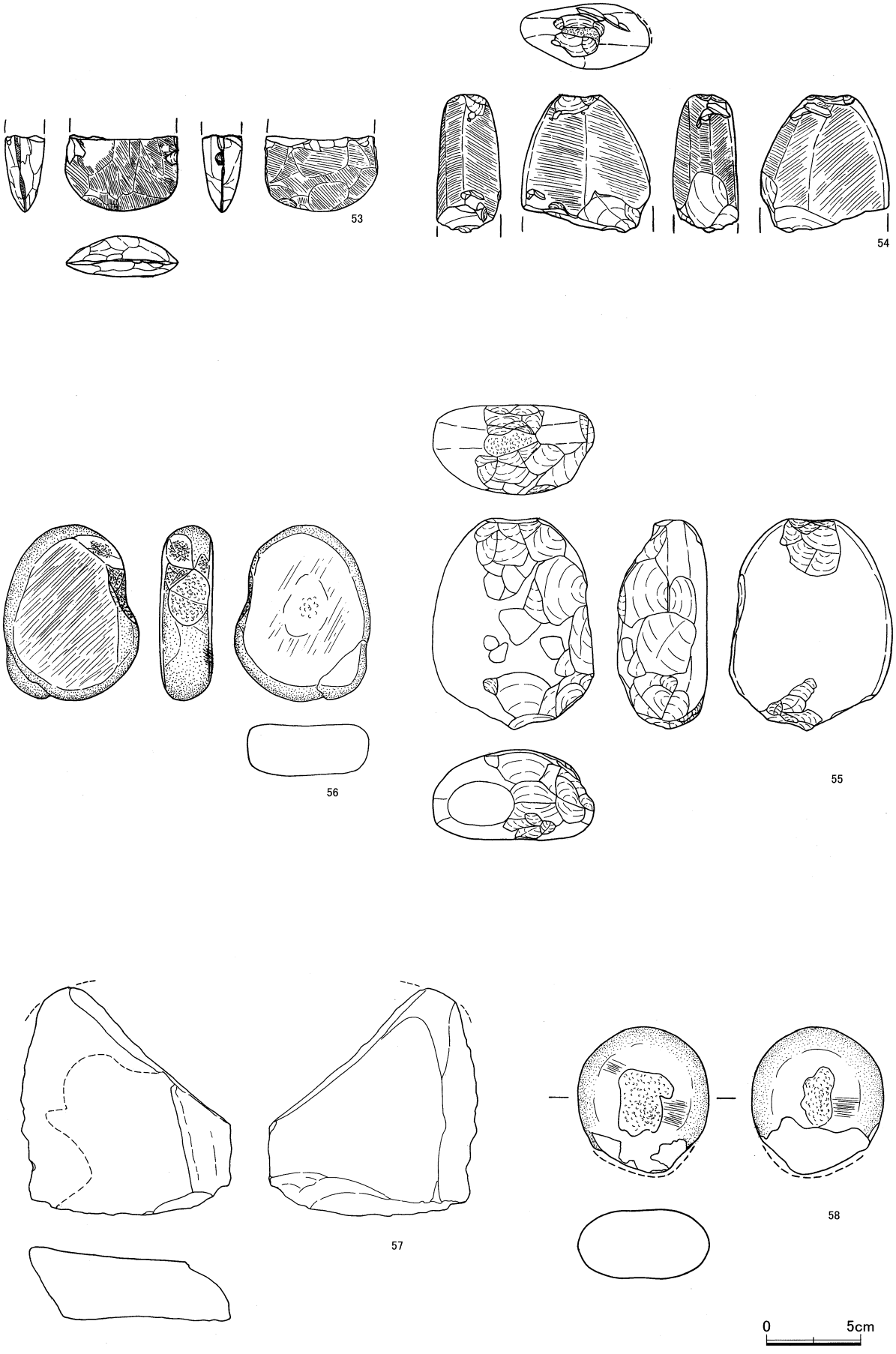
第9図　縄文土器　実測図



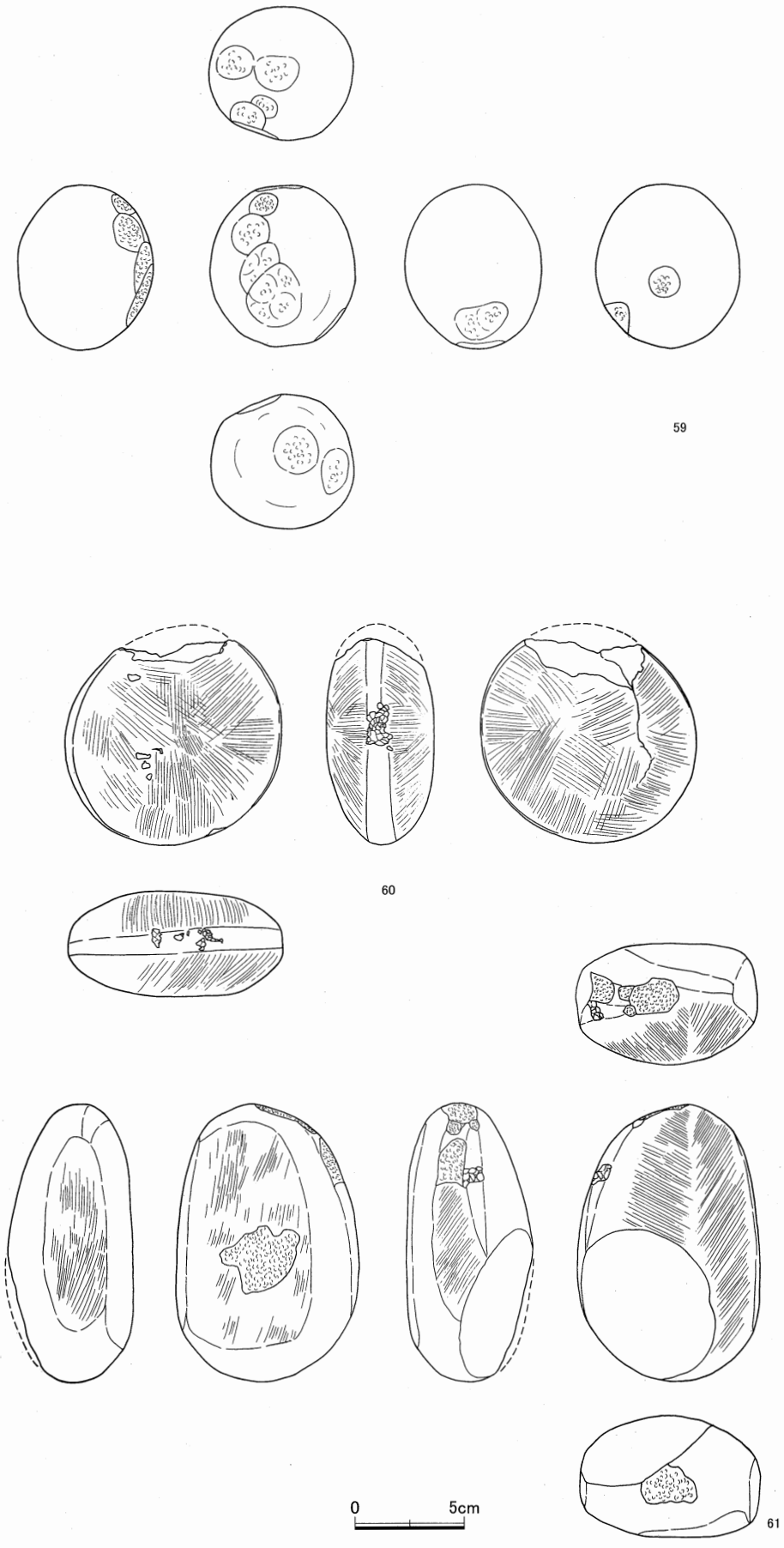
第10図　石器　実測図(1)



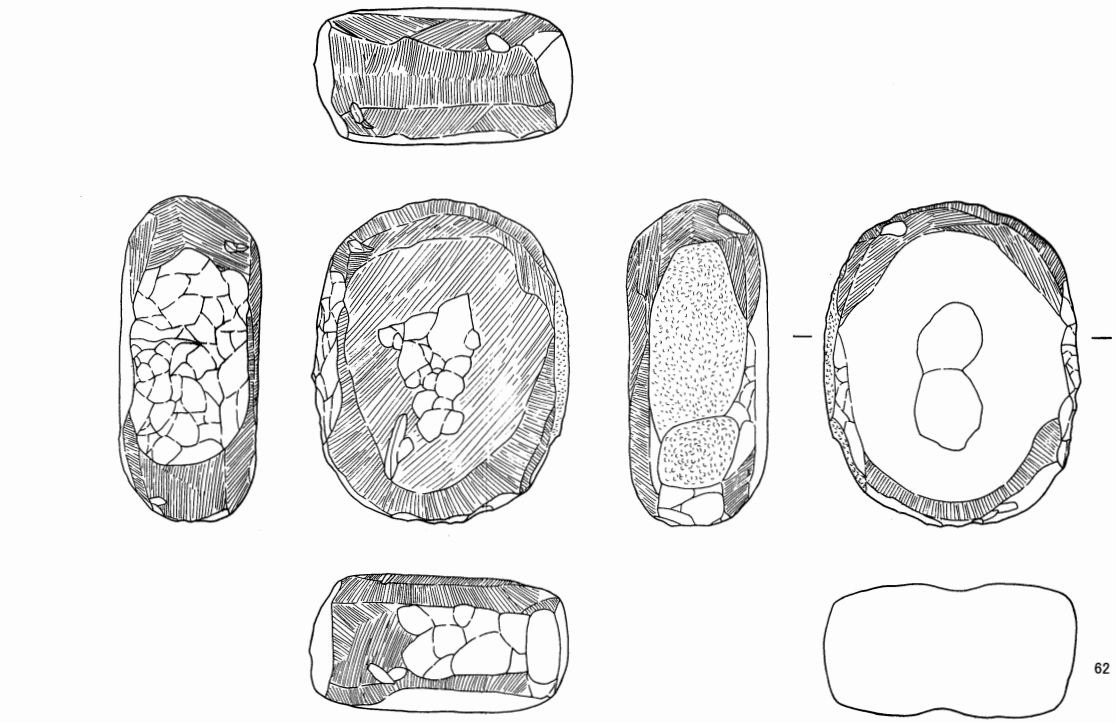
第11図　石器　実測図(2)

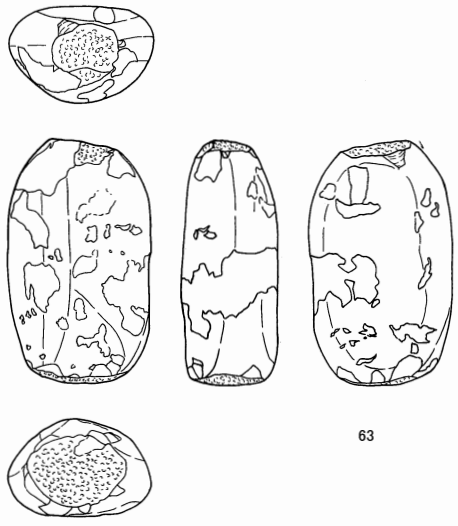


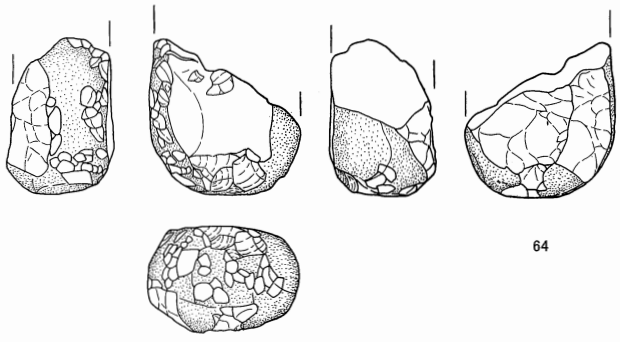
第12図　石器　実測図(3)

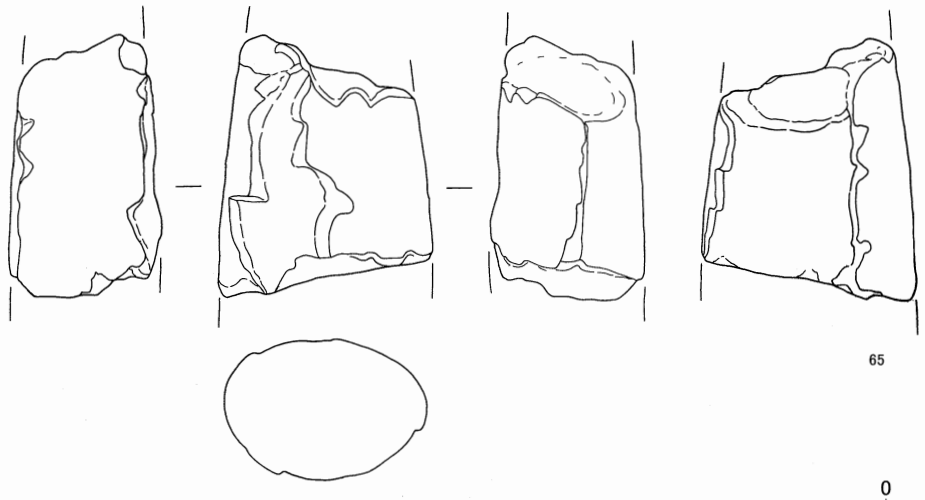


第13図　石器　実測図(4)

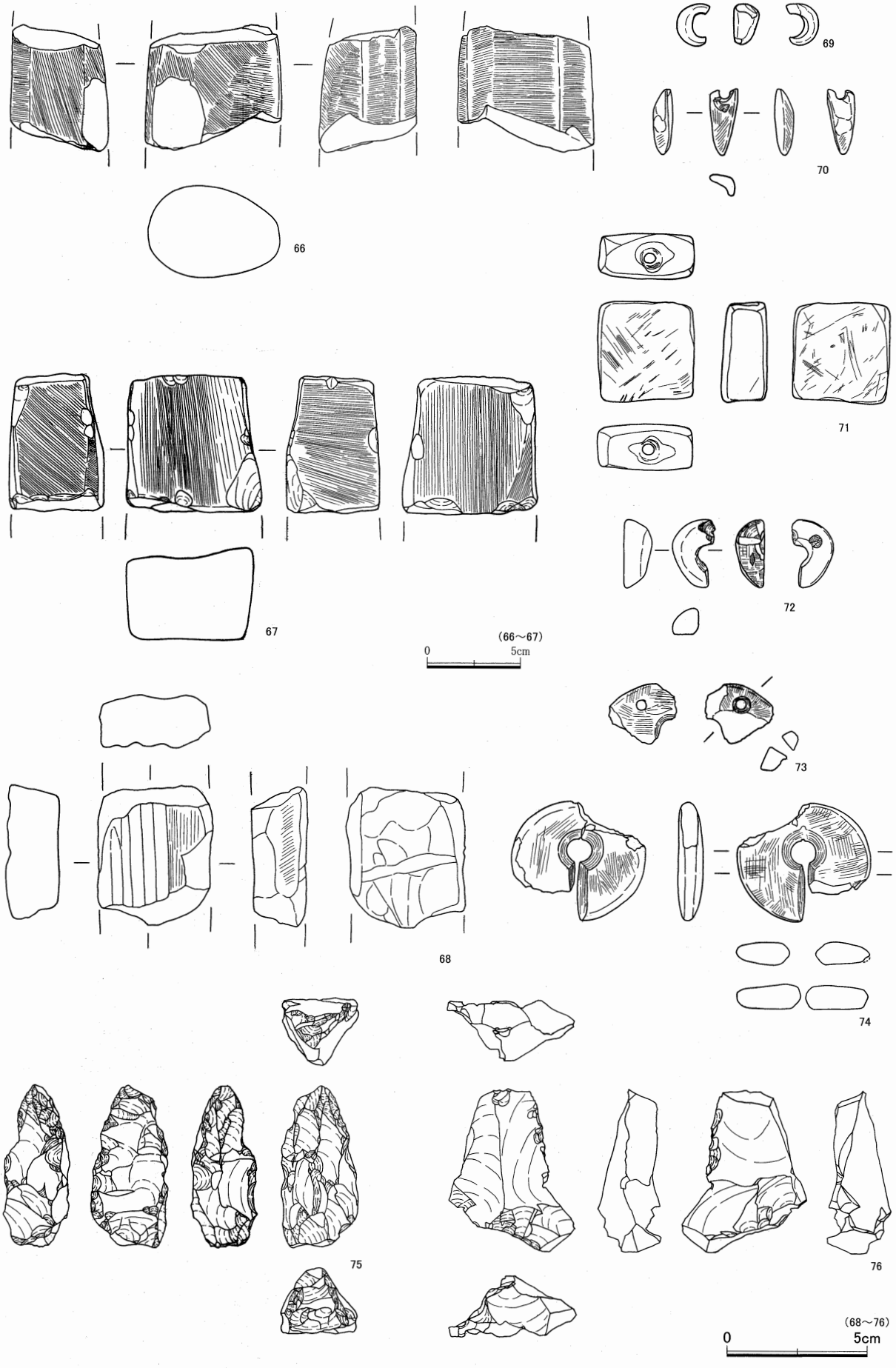




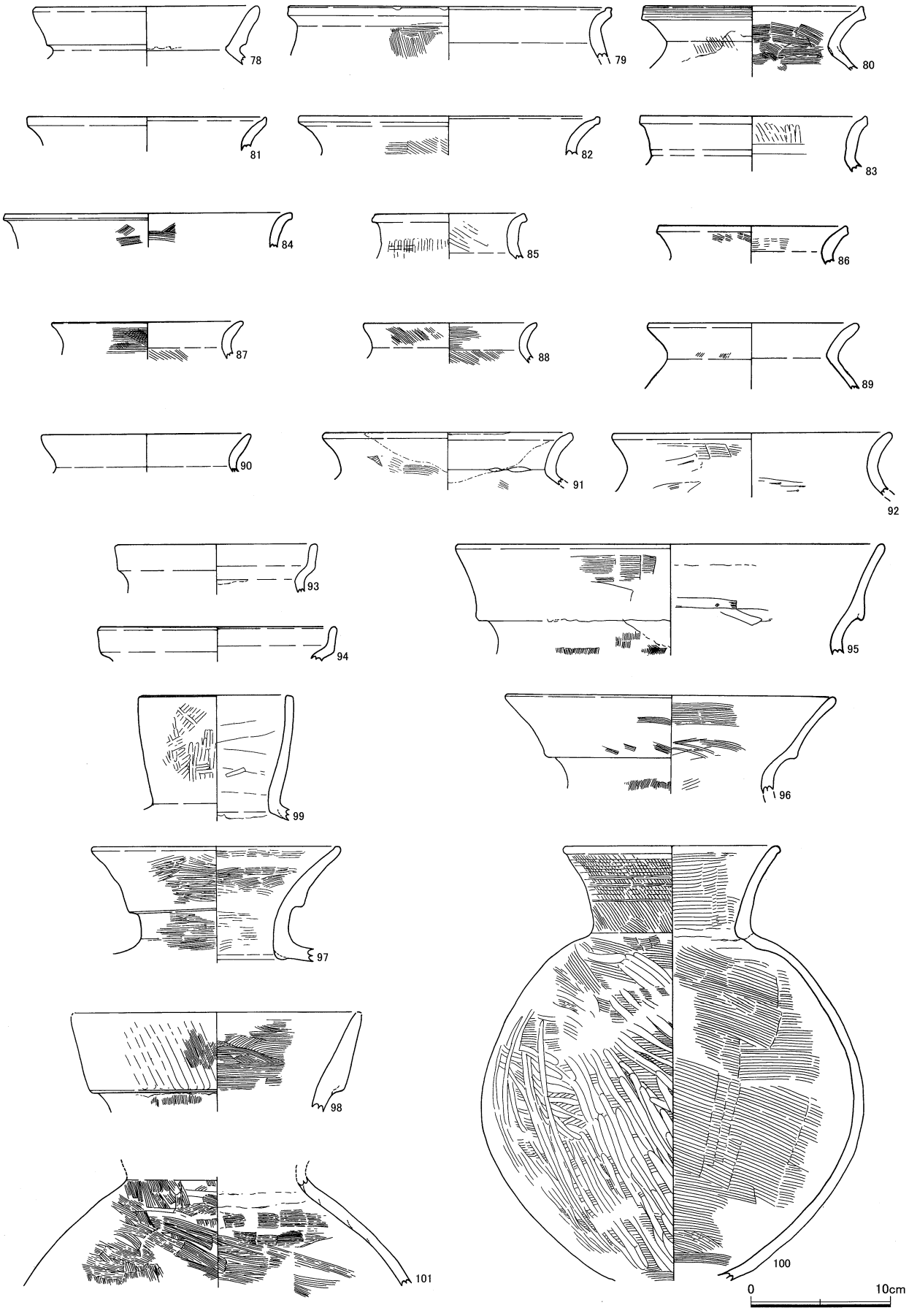




第14図　石器　実測図(5)

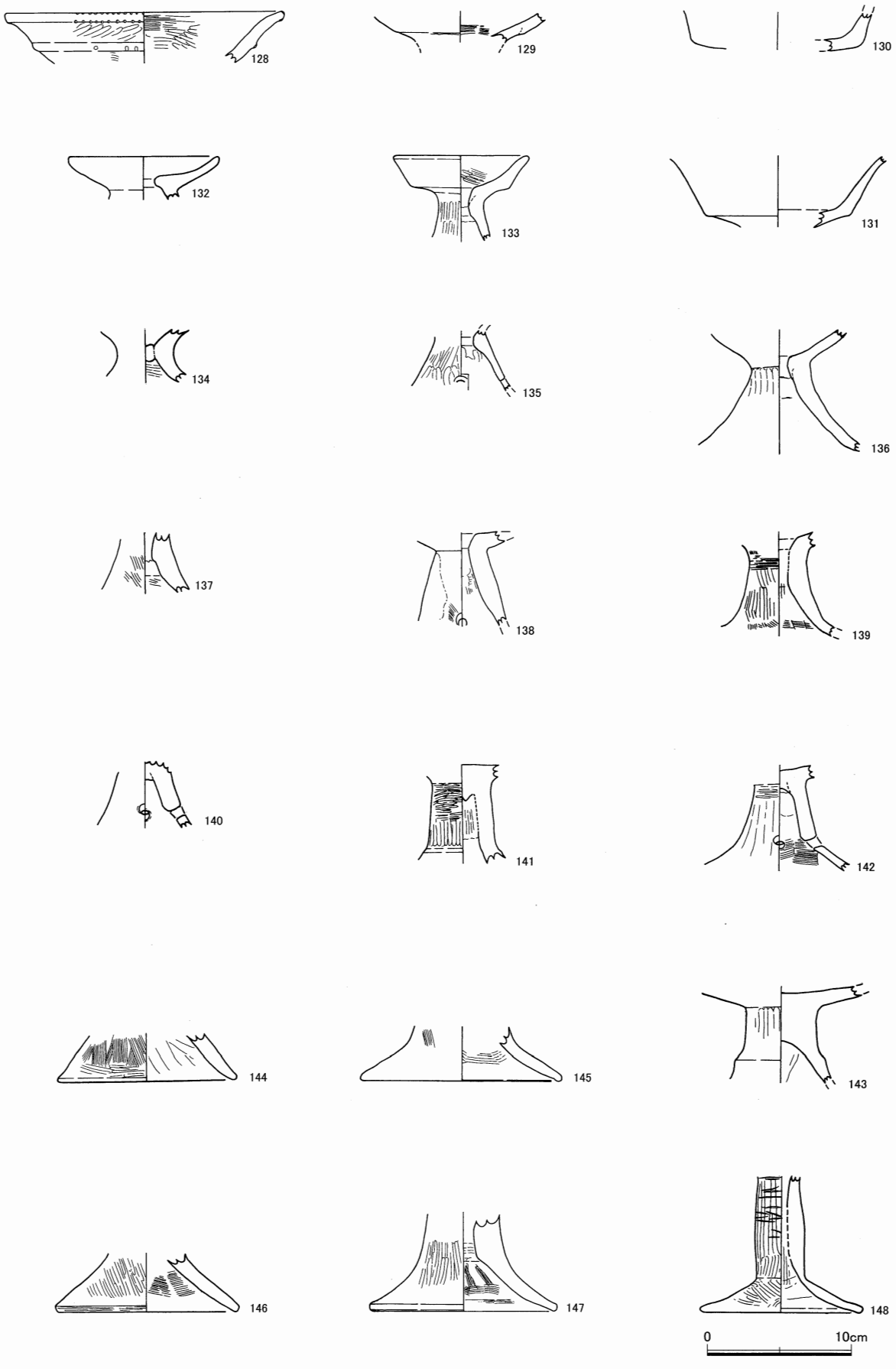


第15図　石器　実測図(6)

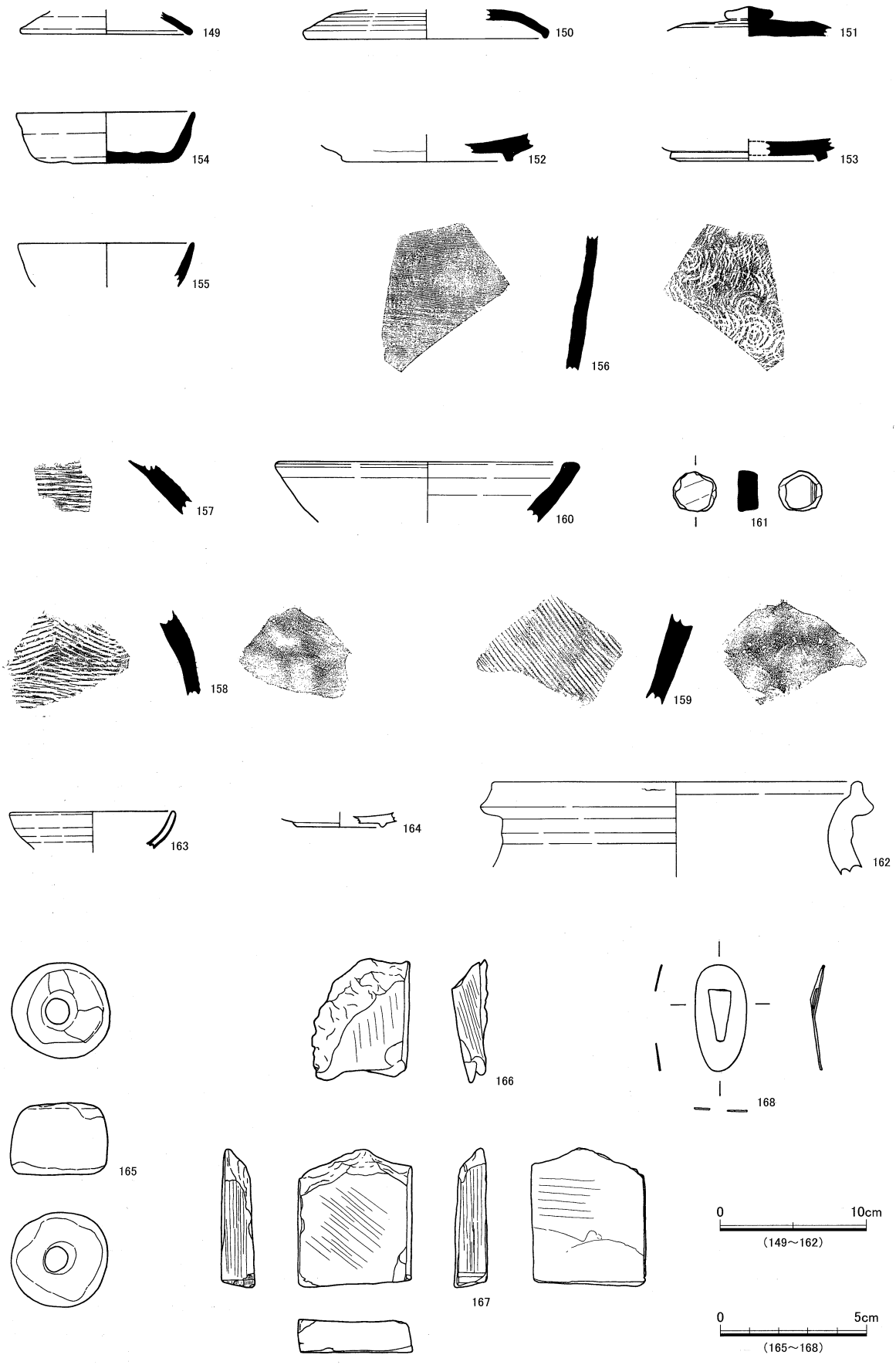


第16図　弥生土器・土師器　実測図

第17図　弥生土器・土師器　実測図



第18図　弥生土器・土師器　実測図



第19図　古代～近世の土器・陶磁器，土製品，石製品，金属製品

番号	遺構	地区 座標	種類	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	色調		備考
1	SX01	h区X586Y301	縄文土器			(3.0)		5%未満	10YR7/2	にぶい黄橙	刈羽式
2	包含層	No.21	縄文土器	深鉢		(4.5)		5%未満	10YR7/3	にぶい黄橙	蜆ヶ森Ⅰ式古段階
3	包含層	X588Y293	縄文土器	深鉢	(24.6)	(5.5)		5%	10YR6/2	にぶい黄橙	蜆ヶ森Ⅰ式古段階
4	SX01	I区X583Y299	縄文土器	深鉢		(2.9)		5%未満	10YR7/3	にぶい黄橙	蜆ヶ森Ⅰ式新段階
5	SX01	h区X585Y299	縄文土器	深鉢		(2.6)		5%未満	内:10YR6/2 外:10YR7/2	内:灰黄褐 外:にぶい黄橙	蜆ヶ森Ⅰ式新段階
6	SX01	h区X585Y300	縄文土器	深鉢		(3.9)		5%	内:10YR6/2 外:10YR7/2	内:灰黄褐 外:にぶい黄橙	蜆ヶ森Ⅰ式新段階　種子圧痕あり
7	包含層		縄文土器	深鉢		(4.8)		5%未満	10YR5/2	灰黄褐	蜆ヶ森Ⅰ式新段階
8	SX01	h区X586Y298	縄文土器	深鉢		(4.2)		5%未満	内:10YR7/2 外:2.5Y2/2	内:にぶい黄橙 外:灰白	蜆ヶ森Ⅰ式新段階
9		試掘2T	縄文土器	深鉢		(3.9)		5%未満	内:10YR6/2 外:10YR5/2	内:灰黄褐 外:灰黄褐	蜆ヶ森Ⅰ式新段階
10	SX01	h区X585Y300	縄文土器			(3.2)		5%未満	10YR7/3	にぶい黄橙	諸磯系　種子圧痕あり
11		X585Y297	縄文土器			(3.2)		5%未満	内:10YR7/3 外:10YR6/2	内:にぶい黄橙 外:灰黄褐	刈羽式
12	SX01	h区X584Y300	縄文土器			(3.8)		5%未満	10YR7/3	にぶい黄橙	刈羽式または諸磯B式か
13	SX01	h区X586Y298	縄文土器	深鉢	(33.7)	(6.5)		5%	内:10YR6/3 外:10YR7/3	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄橙	前期
14	SX01	h区	縄文土器	深鉢	(33.7)	(12.8)		8%	10YR7/2	にぶい黄橙	前期　13と同一個体か
15	SX01	h区X584Y300	縄文土器			(5.1)		10%	内:10YR5/1 外:10YR6/3	内:褐灰 外:にぶい黄橙	前期
16	SX01	h区X585Y299	縄文土器	深鉢	(26.0)	(5.0)		10%	内:10YR6/3 外:10YR5/3	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄褐	八日市新保式か
17		X583Y297	縄文土器	深鉢		(4.7)		8%	内:10YR6/3 外:10YR5/2	内:にぶい黄橙 外:灰黄褐	八日市新保式か　16と同一か
18		X587Y298	縄文土器	深鉢		(4.1)		8%	内:10YR6/3 外:10YR4/1	内:にぶい黄橙 外:褐灰	八日市新保式か　16と同一か
19	SX01	h区X585Y299	縄文土器	深鉢		(3.6)		5%	内:10YR6/3 外:10YR5/3	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄褐	八日市新保式か　16と同一か
20	SX01	h区X584Y300	縄文土器	深鉢		(4.1)		10%	内:10YR6/3 外:10YR5/3	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄褐	八日市新保式か　16と同一か
21		X583Y297	縄文土器	深鉢	(19.0)	(4.6)		5%	10YR7/3	にぶい黄橙	前期～中期か
22		X583Y297	縄文土器	深鉢		(4.1)	(8.5)	20%	内:10YR7/3 外:10YR6/3	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄橙	前期か

表2　遺物観察表（縄文土器）

番号	遺構	地区 座標	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
23	SX01	f 区X581Y301	石鏃	流紋岩(下呂石)	18.5	14.5	3.5	0.5	凹基無茎鏃
24	SK03	X582Y301	石鏃	安山岩か	20.0	18.0	5.0	1.0	凹基無茎鏃
25	SK01	X577Y305	石鏃	無斑晶質安山岩	26.0	21.5	2.0	1.0	凹基無茎鏃
26	包含層	X582Y303	石鏃	チャート(灰)	14.0	16.3	3.3	0.7	凹基無茎鏃
27	SX01	d区X580Y307	石鏃	無斑晶質安山岩	23.0	29.5	2.2	0.6	凹基無茎鏃
28	SX01	X579Y308	石鏃	無斑晶質安山岩	22.0	17.0	2.0	0.4	凹基無茎鏃
29	SX01	f 区X581Y304	石鏃	玉髄(横山石類似)	26.0	22.0	3.5	1.0	凹基無茎鏃
30	SX01	d区X570Y306	石鏃	玉髄(横山石類似)	33.5	20.0	4.0	1.3	凹基無茎鏃
31	SX01	f 区X581Y302	石鏃	安山岩か	13.0	23.0	3.0	0.6	凹基無茎鏃
32	SX01	h区No.22	石鏃	無斑晶質安山岩	37.5	17.5	7.0	3.2	凹基無茎鏃、石錐の可能性あり
33	SX01	h区No.18	石鏃	無斑晶質安山岩	32.1	11.0	3.5	1.2	細身、平基だが基部窄まる
34	SX01	b区X580Y308	石鏃	無斑晶質安山岩	30.0	10.5	3.0	1.0	細身、平基だが基部窄まる
35	SX01	X579Y296	尖頭器	玉髄(メノウ)	42.5	26.0	16.0	15.0	石槍か
36	SX01	a区X580Y311	尖頭器	碧玉(鉄石英)	46.5	25.0	10.0	10.0	未製品か
37	SX01	d区X580Y306	尖頭器	無斑晶質安山岩	34.5	25.0	11.5	6.0	
38	SX01	h区No.189	石錐	玉髄	18.5	18.0	2.0	0.7	
39	SX01	d区X581Y306	石錐	玉髄(メノウ)	45.5	19.6	7.6	3.0	
40	包含層	e区X582Y309	石匙	玉髄(横山石類似)	40.0	39.0	6.5	8.0	横型
41	SK02	東西ベルトX585Y311	石匙	玉髄	29.5	44.5	7.3	5.0	横型
42		h区X581Y309	石匙	チャート(灰)	32.3	42.1	32.4	7.0	横型
43	SX01	h区X586Y301	石匙	無斑晶質安山岩	34.0	47.0	9.5	10.0	横型
44	SX01	d区No.939	石匙	無斑晶質安山岩	26.1	33.5	5.0	2.0	横型
45	SX01	d区X580Y306	磨製石斧	蛇紋岩類	21.0	10.5	4.5	2.0	
46	SX01	d区X580Y306	磨製石斧	蛇紋岩類	21.4	11.0	4.5	2.0	
47	SX01	b区X581Y307	磨製石斧	蛇紋岩類	62.0	28.0	12.0	26.0	
48	SX01	h区No.17	磨製石斧	蛇紋岩類	58.0	37.0	14.5	33.0	定角式
49	SX01	h区No.172	磨製石斧	蛇紋岩類	88.0	46.0	21.5	141.0	定角式
50	SX01	h区No.198	磨製石斧	蛇紋岩類	75.0	51.0	24.5	136.0	定角式
51	SX02	X584Y307	磨製石斧+凹石	蛇紋岩類	102.0	48.0	21.5	150.0	定角式
52	西側側溝	X578Y297	磨製石斧+敲石	砂岩	106.0	54.5	26.0	233.0	定角式
53	SX01	j区No.605	磨製石斧	安山岩か粘板岩	40.5	60.5	20.0	63.0	
54	SX01	b区No.3	砥石+打欠石錘	花崗岩	72.0	67.0	34.0	196.0	
55	SX01	d区No.836	磨石+打欠石錘	凝灰岩	111.0	85.0	47.0	606.0	
56	SX01	d区No.854	石皿+石錘	流紋岩か	92.5	71.2	28.5	298.0	
57	北側溝	X586Y306	石皿	凝灰岩	120.0	110.8	38.5	577.0	
58	包含層	X579Y298	磨石+凹石	砂岩	77.0	69.0	35.0	258.0	
59	SX01	d区No.824	磨石+敲石	凝灰岩	75.5	66.5	62.0	436.0	
60	北側溝	X586Y306	磨石+敲石	安山岩か	94.0	100.0	49.0	655.0	
61	SX01	b区No.6	磨石+敲石	砂岩	128.5	84.0	58.0	804.0	
62	SX01	b区No.2	磨石+凹石+敲石	凝灰岩	12.8	10.2	5.3	884.0	
63	機械掘り	X590Y228	敲石	泥岩	96.5	57.0	38.5	270.0	
64	SX01	h区No.441	敲石	蛇紋岩類	62.0	59.5	42.0	212.0	ハンマーストーンとして利用か
65		X588Y297	石棒	凝灰岩	104.0	84.5	60.5	584.0	被熱
66	SX01	c区No.518	石棒	凝灰岩	67.0	72.0	51.5	331.0	
67	SX01	b区No.91	砥石	安山岩	73.0	72.5	5.0	441.0	
68	SX01	a区X578Y311	玉砥石	砂岩	48.0	42.0	22.0	66.0	
69	SX01	f 区X581Y301	玉	滑石	15.0	11.5	9.0	1.0	抉状耳飾(柱状抉)の再利用品　先端磨きあり
70	SX01	a区X579Y312	玉	滑石	23.5	9.5	7.5	2.0	管玉状のものを再利用したものか
71	SX01	b区No.265	玉	蛇紋岩類	34.0	36.0	16.0	38.0	扁平な四角柱状
72	SX01	f 区X580Y301	玉	滑石	24.3	15.0	10.0	4.0	抉状耳飾りから玉に転用
73	SX01	f 区X582Y306	玉	滑石	21.8	24.0	7.5	4.0	抉状耳飾りから玉に転用
74	SX01	d区X580Y306	抉状耳飾	滑石か	42.0	47.5	9.0	19.0	被熱
74	SX01	b区X581Y307	抉状耳飾	滑石か					被熱　367と接合
75	SX01	b区No.63	原石	碧玉(鉄石英)	58.0	27.5	22.6	36.0	
76	SX01	b区No.24	剥片	頁岩	58.0	44.5	22.0	32.0	
77	SX01	h区No.629	石核	玉髄(横山石)	55.3	39.3	25.4	53.0	

表3　遺物観察表（石器）

番号	遺構	地区（取上げNo.） 座標（グリッド）	種類	器種	法量cm（ ）は復元径・残存高 口径	器高	底径	残存率	色調		備考
78		X587Y298	弥生土器	甕	(16.2)	(4.3)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	有段口縁、外面に煤付着
79	SX01	l区No.949	弥生土器	甕	(23.4)	(3.8)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	外面及び内面口縁端部に煤付着、外面刷毛
80	SX01	a区No.596	弥生土器	甕	(16.0)	(4.7)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	
81	SX01	b区No.247	弥生土器	甕	(17.4)	(2.5)		5%未満	10YR5/2	灰黄褐色	外面に煤付着
82		X583Y297	弥生土器	甕	(22.0)	(2.8)		5%未満	10YR4/2	灰黄褐色	外面に煤付着、白色砂粒多含、外面刷毛
83	SX01	b区No.227	弥生土器	甕	(16.4)	(4.0)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	
84	SX01	X581Y305	弥生土器	甕	(20.8)	(3.7)		5%未満	2.5YR6/2	灰黄色	
85		X577Y306	弥生土器	甕か壺	(10.8)	(3.3)		5%未満	10YR5/2	灰黄褐色	外面に煤付着
86		X583Y297	弥生土器	甕	(13.5)	(2.7)		5%未満	10YR6/2	灰黄褐色	外面に煤付着
87		X582Y307	弥生土器	甕	(14.0)	(2.7)		5%未満	10YR7/3	にぶい黄橙色	外面に煤付着
88	SX01	b区No.1	弥生土器	甕	(12.6)	(2.9)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	外面に煤付着、外面刷毛
89	SX01	b区No.1	弥生土器	甕	(15.1)	(4.7)		5%未満	10YR7/4	にぶい黄橙色	外面赤彩か、外面刷毛
90	SX01	X579Y308	弥生土器	甕	(15.0)	(2.8)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	
91	SX01	g区No.696	弥生土器	甕	(18.0)	(3.8)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	内・外面・断面に煤付着
92	SX01	e区No.925	弥生土器	甕	(20.3)	(4.6)		5%	10YR6/3	にぶい黄橙色	白色・灰色砂粒多含
93		X588Y293	弥生土器	壺	(14.3)	(3.5)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	外面に煤付着
94	SX01	b区No.27	弥生土器	甕	(16.9)	(2.5)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	
95	SX01	h区No.110	弥生土器	壺	(30.6)	(8.0)		5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	外面に煤付着、外面刷毛
96	SX01	d区No.942	弥生土器	壺	(24.0)	(7.3)		5%未満	10YR7/4	にぶい黄橙色	外面に煤付着、内外面刷毛
97	SX01	a区No.370,661980～3	弥生土器	壺	17.8	(8.3)		15%	2.5YR5/8	明赤褐色	内外面赤彩、口縁部被熱、内外面磨き
98	SX01	h区No.171	弥生土器	壺	(21.0)	(6.2)		5%	5YR6/6	橙色	外面刷毛後磨き、内面刷毛
99	SX01	g区No.644	弥生土器	壺	(11.2)	(9.0)		5%	10YR5/2	灰黄褐色	外面磨き
100	SX01・P01	SX01l区No.946他	弥生土器	壺	15.3	(31.4)		70%	10YR6/3	にぶい黄橙色	内外面粗い刷毛、外面粗い磨き
101	SX01	b区No.1	弥生土器	壺		(8.0)		20%	10YR6/3	にぶい黄橙色	内外面刷毛
102		X585Y308	弥生土器	甕		(4.6)	8.0	10%	10YR6/4	にぶい黄橙色	内外面刷毛、台付甕の台部
103	SX01	d区No.838	弥生土器	壺		(2.0)	5.9	5%	内:10YR6/4 外:7.5YR7/4	内:にぶい黄橙色 外:にぶい橙色	
104	SX01	d区No.826	弥生土器	壺		(2.0)	5.7	5%未満	10YR7/3	にぶい黄橙色	
105	SX01	b区No.280	弥生土器	壺		(3.0)	5.0	5%	内:10YR5/3 外:2.5YR5/6	内:にぶい黄褐色 外:明赤褐色	外面赤彩、内面刷毛
106	SX01	l区No.950	弥生土器	甕か壺		(3.0)	3.7	5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	内面刷毛、底部外面削り
107	SX01	h区X584Y303	弥生土器	壺		(3.0)	4.3	5%	10YR7/3	にぶい黄橙色	外面削り
108	SX01	b区No.977	弥生土器	壺		(3.9)	7.6	5%	10YR6/3	にぶい黄橙色	外面削り、内面刷毛
109	SX01	X580 Y312	弥生土器	甕		(2.8)	3.8	5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	内面刷毛
110	SX01	l区No.950	弥生土器	甕		(3.0)	3.7	5%	10YR7/3	にぶい黄橙色	外面刷毛後削り、内面刷毛
111	SX01	h区No.401	弥生土器	壺		(2.8)	7.1	5%	10YR6/2	灰黄褐色	外面刷毛後磨き
112	SX01	b区No1	弥生土器	壺		(4.9)	3.6	5%未満	10YR6/3	にぶい黄橙色	内外面刷毛、底部外面磨き
113	SX01	l区No.945	弥生土器	壺		(8.0)	6.0	5%	10YR7/3	にぶい黄橙色	内面粗い刷毛、外面刷毛後削り
114		X584Y312	弥生土器	壺		(5.9)	7.8	5%	10YR6/3	にぶい黄橙色	内面粗い刷毛
115	SX01	h区X586Y298	土師器	小型壺	(12.6)	(5.2)		10%	10YR6/3	にぶい黄橙色	
116	SX01	d区No.748	土師器	小型壺	(10.0)	(7.2)		25%	10YR7/3	にぶい黄橙色	
117	SX01	l区No.558	土師器	小型壺	(13.6)	(5.1)		10%	10YR7/3	にぶい黄橙色	
118	SX01	h区X585Y299	土師器	小鉢	(8.8)	(3.2)		25%	10YR6/3	にぶい黄橙色	内面磨きか
119	SX01	b区No.216	土師器	小型壺か		(1.7)	5.2	20%	10YR7/3	にぶい黄橙色	台部
120		X583Y309	土師器	小型壺か甕		(3.6)	6.9	10%	10YR7/3	にぶい黄橙色	台部
121	SX01	b区No.97	弥生土器	蓋	4.4	6.0		80%	10YR6/2	灰黄褐色	笠部外面磨き
122	SX01	c区X581Y312	弥生土器	蓋	4.8	(3.0)		40%	10YR6/3	にぶい黄橙色	口縁部から内面黒色化
123	SX01	e区X578Y306	弥生土器	蓋		(2.8)		15%	内:10YR7/3 外:2.5YR4/8	内:にぶい黄褐色 外:赤褐色	外面赤彩、磨き
124	SX01	l区No.951	弥生土器	蓋		(2.5)		10%	内:10YR7/3 外:2.5YR3/6	内:にぶい黄褐色 外:暗赤褐色	内外面赤彩、磨き
125	SX01	d区No.828	土師器	蓋		(3.6)		40%	内:10YR7/4 外:2.5YR4/8	内:にぶい黄褐色 外:赤褐色	外面赤彩、磨き
126		X577Y311	弥生土器	蓋		(2.7)		5%	10YR7/4	にぶい黄橙色	
127	SX01	c区No.547	土師器	蓋		(3.2)		15%	内:2.5Y6/2 外:10YR7/3	内:灰黄色 外:にぶい黄橙色	
128	SX01	f区No.890	弥生土器	高杯か器台	(19.5)	(3.5)		5%未満	10YR6/3 赤彩:2.5YR5/6	にぶい黄褐色 赤彩:明赤褐色	外面口縁端部に刻み目2列、受部外面稜に刻み目、内外面赤彩、口縁部内外面被熱による黒色化
129	SX01	h区X584Y300	弥生土器	高杯か器台		(2.0)		5%未満	10YR6/2 赤彩:10R4/8	灰黄褐色 赤色	内外面磨き、赤彩
130	SX01	c区No.556	弥生土器	高杯か器台		(2.6)		5%	10YR7/3 赤彩:2.5YR5/8	にぶい黄橙色 明赤褐色	内外面赤彩
131	SX01	d区	弥生土器	高杯か器台		(5.0)		5%	10YR7/3	にぶい黄橙色	
132	SX01	b区No.1	土師器	器台	(10.2)	(3.0)		15%	10YR5/3	にぶい黄褐色	
133	SX01	d区No.817	弥生土器	器台	9.3	(5.9)		60%	10YR7/3 赤彩:2.5R5/6	にぶい黄橙色 赤色	内外面赤彩、磨き
134	SX01	d区No.850	弥生土器	高杯		(3.7)		10%	2.5YR6/4	にぶい橙色	
135	SX01	l区No.947	土師器	器台		(4.2)		20%	10YR6/4 赤彩:2.5YR5/6	にぶい黄橙色 明赤褐色	脚部外面赤彩、磨き
136	SX01	c区No.515	土師器	器台		(8.4)		50%	10YR7/3 赤彩:2.5R5/6	にぶい黄橙色 赤色	脚部外面赤彩、磨き
137	SX01	c区No.530	土師器	器台		(3.8)		25%	10YR7/3 赤彩:2.5YR3/6	にぶい黄橙色 暗赤色	脚部外面赤彩、磨き
138	SX01	h区No.631	弥生土器	器台		(6.5)		30%	10YR6/2 赤彩:10R4/6	灰黄褐色 赤色	外面赤彩
139	SX01	f区No.895	弥生土器	器台		(7.2)		30%	10YR6/3 赤彩:10R4/6	にぶい黄橙色 赤色	脚部外面赤彩、磨き、脚部内面刷毛
140	SX01	X581Y312	土師器	器台		(4.5)		10%	10YR6/3	にぶい黄橙色	

表4 遺物観察表（弥生～古墳時代の土器）

番号	遺　構	地区（取上げNo.） 座標（グリッド）	種　類	器　種	法量cm（　）は復元径・残存高 口径	器高	底径	残存率	色　調		備　考
141		X577Y311	弥生土器	高杯		(6.8)		10%	10YR6/3 赤彩:2.5YR4/6	にぶい黄橙色 赤褐色	内外面磨き、外面・杯部内面赤彩、脚部内面黒色化
142	SX01	d区No.785	土師器	高杯		(7.2)		55%	10YR7/3 赤彩:10R5/6	にぶい黄橙色 赤色	脚部外面・杯部内外面赤彩、脚部内面刷毛、脚部穿孔4か所
143	SX01	e区No.921	弥生土器	高杯		(6.6)		45%	10YR7/3 赤彩:2.5YR4/6	にぶい黄橙色 赤褐色	脚部外面磨き、外面・杯部内面赤彩
144	SX01	b区No.344	土師器	高杯か器台		(3.2)	(12.4)	5%	10YR6/3	にぶい黄橙色	脚部外面刷毛、端部付近磨き
145	SX01	f区X581Y304	土師器	高杯か器台		(3.7)	(14.0)	5%	2.5Y5/2 赤彩:2.5YR4/8	暗灰黄色 赤褐色	脚部内面刷毛、脚部外面赤彩
146	SX01	b区No.974	土師器	高杯か器台		(4.0)	(12.5)	5%	2.5Y6/2	灰黄色	脚部外面磨き、脚部内面刷毛
147	SX01	d区No.821	土師器	高杯か器台		(6.5)	12.7	40%	10YR7/2	にぶい黄橙色	脚部外面磨き、脚部内面刷毛
148	SX01	g区No.1010	土師器	高杯か器台		(9.5)	11.3	65%	10YR7/3	にぶい黄橙色	脚部外面磨き
149	SX01	X581Y312	須恵器	杯Ｂ蓋	(11.6)	(2.0)		5%未満	5Y6/1	灰色	
150	SX01	a区X580Y312	須恵器	杯Ｂ蓋	(16.3)	(2.0)		15%	2.5Y6/1	黄灰色	外面頂部付近回転ヘラ削り
151		X583Y311	須恵器	杯Ｂ蓋		(1.1)		10%	2.5Y6/2	灰黄色	外面頂部付近回転ヘラ削り
152		X585Y312	須恵器	杯Ｂ		(1.9)	(11.4)	20%	2.5Y6/2	灰黄色	底部ヘラ切
153	SX01	e区No.908	須恵器	杯Ｂ		(1.6)	(10.8)	15%	2.5Y5/1	黄灰色	底部ヘラ切り後ナデ
154	SX01	b区No.277	須恵器	杯Ａ	12.1	9.4	8.7	80%	N6/1	灰色	底部回転ヘラ切、白色小粒多く含む
155	SX01	X580Y312	須恵器	杯	(9.8)	(3.0)		5%未満	5Y6/1	灰色	
156	SX01	X580Y312	須恵器	壺		(9.0)		5%未満	N7/1	灰白色	内面同心円当て具
157	SX01	X584Y306	珠洲	甕		(4.0)		5%未満	5Y5/1	灰色	外面平行叩き、内面ナデ
158		X585Y312	珠洲	甕		(5.9)		5%未満	10YR6/1	褐灰色	外面綾杉状に叩打
159	SX01	X581Y312	珠洲	甕		(5.7)		5%未満	2.5Y6/	灰黄色	外面平行叩打
160		X579Y298	珠洲	片口鉢	(28.0)	(4.1)		5%未満	10YR6/1	褐灰色	
161	SX01	e区No.903	珠洲	碁石				100%	N5/1	灰色	直径約3.0cm、内面に卸目
162	SX01	c区No.378	八尾か	甕	(25.6)	(5.5)		5%未満	2.5YR6/6	橙色	
163	SX01	X580Y306	越中瀬戸	碗	(11.2)	(2.6)		5%	胎土:10YR7/1 釉:10YR2/1	灰白色 黒色	
164		X577Y311	越中瀬戸	丸皿			(6.0)	10%	胎土:5YR7/4 釉:5YR3/3	にぶい橙色 暗赤褐色	
165	SX01	g区No.661	土製品	紡錘車	2.6	2.5	2.8	100%	10YR8/1	灰白色	孔径0.8cm、白色土粒多く含む
166		X585Y304	石製品	硯カ		(3.9)			2.5Y5/1	黄灰色	泥岩
167		X579Y298	石製品	砥石		(4.6)			2.5Y7/3	浅黄色	粘板岩
168	SX01	X578Y306	金属製品	切羽		3.6		100%			

表5　遺物観察表（弥生～江戸時代の遺物）

第Ⅳ章　総　括

小竹貝塚の遺跡範囲の南端を東西方向に横切る谷地形を検出した。谷地形は東から西に向かって傾斜しており、調査区の北東域の微高地に各時期の集落の主体が広がっているものと推測される。出土遺物から、小竹貝塚の主だった時期である縄文時代前期以外にも弥生時代終末期～古墳時代初頭の多数の土器を確認することができ、当該期に調査地周辺に集落があったことが判明した。　　（鹿島）

第１節　縄文時代

縄文時代の遺物は、谷地形SX01から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての多量の遺物に混じって出土しているが、これ以外は、SK04とP16から少量出土しているにとどまる。このことは、付近に縄文時代の集落が存在していたことを示すと共に、弥生終末～古墳時代の集落が形成される際に縄文時代の遺構が破壊され、遺物が谷に流れ込んだことを示唆する。

土器は、前期後葉の蜆ヶ森Ⅰ式が主体を占めるほか、量は少ないものの、後期末の八日市新保式の可能性が高いものも出土している。石器は、定形的なものは磨石が最も多く、磨製石斧や石鏃、敲石も多く出土している。また、定型的なもの以外にも、多量の剝片や石核、石材と思われる礫なども出土しており、本地点付近で石器製作が行われていたと推定される。

これらのことから、本地点付近における縄文時代の人間活動は、前期後葉を中心とし、後期にも規模は小さいながら行われていたと言える。また、付近で行われた活動は、石鏃を用いた狩猟や磨石や敲石、磨製石斧を用いた活動を中心とし、石器製作も行われていた。

本遺跡は、これまでの県文化振興財団を中心とする調査で、前期中葉の廃棄場や前期後葉～末様の貝塚、前期後葉を中心とする居住域が検出されている（町田 2010. 2011）。今回報告した地点から出土した土器は、前期後葉を中心とし、先に見つかった居住域（富山県文化振興財団調査地点 A 地区）の年代とほぼ同様である（町田 2010）。また、石器については、磨石が多く出土している点で異なるが、その点を除けば、居住域や貝塚の状況と類似している（町田 2013）。そのため、今回の調査成果は、先に見つかった前期後葉を中心とする集落の居住域が本地点付近まで広がっていたことを示すだろう。（納屋内）

第２節　弥生時代終末期～古墳時代初頭

弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が大量に谷地形 SX01 に廃棄されている状態で出土した。その他の遺構は、当該期の土器が覆土中から出土する柱穴状のピットがみられるものの、建物配置とはならず、調査区外に集落の本体が存在していたようである。

出土した土器は細片資料が多く、甕形土器や壺形土器などの体部片が大量にあり個体数は多いと推測されるが、完全な形状に復元できるものは殆どない。一方で、高杯形土器や器台形土器など赤彩された土器も一定量みられた。これらについては熱を受けたものもあり、祭祀などに用いられた後、破損したものが廃棄されたようである。土器には、八町Ⅱ遺跡にみられる布留系甕はみられず、いわゆる白江式土器が中心の時期で、若干前後する時期の土器も含まれていると推測される。北東に約 40 mほどの地点の発掘調査では、本調査区の時期より遡る弥生時代後期前半の猫橋式土器が出土する溝跡を検出した（富山市教委 2013b）。

本遺跡の南に広がる台地上（標高約 20 ～ 30 m）には、弥生時代後期前半の方形周溝墓を有する呉羽モグラ池遺跡（小林 1995）や古墳時代前期前半とみられる呉羽三ッ塚古墳が築かれる（小黒 2004）。さらに台地の縁辺部には、弥生時代終末から古墳時代の遺物が出土する山寺谷Ⅰ遺跡、山寺谷Ⅱ遺跡の集落が所在する。このように、呉羽丘陵北西部の台地上には弥生時代後期～古墳時代前期にかけての墳墓・古墳や集落が所在する。小竹貝塚の弥生時代後期～古墳時代初頭の集落は、それらの北端の台地の縁辺部に広がる低湿地の微高地（標高約 2 m）に位置していることから、台地上に墳墓や古墳を築造した有力者と関連のある集団の一部が、低湿地での水田耕作などを営むために谷地形周辺の微高地に人々が居を構えていたと推測される。

第３節　古代以降

谷地形からは、奈良～平安時代の須恵器や鎌倉～室町時代の珠洲焼、八尾焼、江戸時代の越中瀬戸焼など古代～近世にかけての遺物が僅かに出土しているが、当該期に属する土坑や柱穴などの遺構は確認していない。

遺跡南の台地上には奈良～平安時代の掘立柱建物や竪穴建物を多数検出した呉羽小竹堤遺跡（富山市教委 1989）や平安時代の須恵器を焼成した小竹源平山窯跡が営まれることから、谷地形にみられた須恵器は、それら周辺の集落の人々が移動に伴って持参していたものが破損し、廃棄されるなどの二次的な要因で谷地形から出土したと推測できる。（鹿島）

参考文献

石川県立埋蔵文化財センター 1986『漆町遺跡Ⅰ』

小黒智久 2004「呉羽丘陵北西部における古墳の出現」『富山市の遺跡物語』富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報 No.5

越坂一也 1987「4　第4群土器　蜆ヶ森式期」『石川県能都町　真脇遺跡』能都町教育委員会・真脇遺跡調査団 pp.51-60

小島俊彰 2008「蜆ヶ森式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション pp.298-303

小林高範 1995「呉羽モグラ池遺跡」『富山市考古資料館報』No.28 富山市考古資料館

(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2014『富山市小竹貝塚の発掘調査成果』報道発表資料

酒井重洋 1990「越中における在地窯の諸問題」『中世北陸の在地窯』北陸中世土器研究会

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告書』第五分冊

鈴木道之助 1991『図録　石器入門事典　縄文』柏書房 pp.186

高橋浩二 2005「富山県における高地性集落の解体と古墳の出現」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会

寺崎祐助 2011「越後の前期後半期土器の展望　－刈羽式を中心に－」『第24回縄文セミナー　縄文前期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会

富山県教育委員会 1972『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

富山市教育委員会 1989『昭和63年度 富山市埋蔵文化財発掘調査概要』

富山市教育委員会 1994『史跡北代遺跡発掘調査概要』

富山市教育委員会 2004『富山市北代加茂下Ⅲ遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2008『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2009『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ―水橋上砂子坂遺跡・小竹貝塚―』

富山市教育委員会 2013『富山市遺跡地図』

富山市教育委員会 2013 a『富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書』

富山市教育委員会 2013 b『富山市小竹貝塚発掘調査報告書』

中村由克 2013「小竹貝塚の石器の石材利用」『シンポジウム　「富山の石材と玉髄・碧玉」 予稿集』石器石材のつどい・富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 pp.6-10

婦中町教育委員会 2003『富山県婦中町鍛冶町遺跡発掘調査報告』

藤井昭二 1964「地質からみた射水平野の形成と放生津潟の変遷」『放生津潟の地学的研究』

藤井昭二 2000『大地の記憶―富山の自然史』桂書房

町田賢一 2010「(2) 本調査　③小竹貝塚」『埋蔵文化財年報　平成21年度』, 富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所, pp.20-23

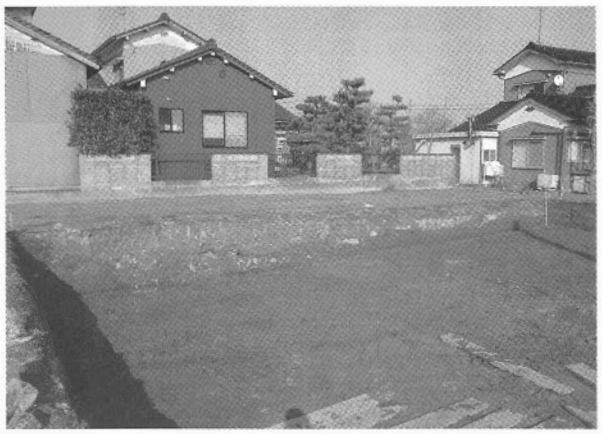
町田賢一 2011「(2) 本調査　①小竹貝塚」『埋蔵文化財年報　平成22年度』, 富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所, pp.11-14

町田賢一 2013「小竹貝塚の調査と石器の概要」『シンポジウム　「富山の石材と玉髄・碧玉」 予稿集』, 石器石材のつどい・富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所, pp.1-5

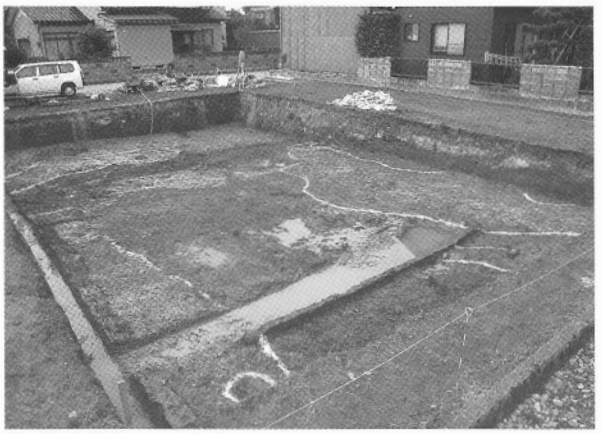
八尾町教育委員会 1985『富山県八尾町長山遺跡・京ヶ峰古窯跡』

山内賢一・林寺厳州・小林高範・古川知明 1993「小竹貝塚出土の遺物について」『富山市考古資料館紀要』 第13号　富山市考古資料館

吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



調査区北壁土層堆積状況（南から）



遺構検出状況（東から）

調査区東壁土層堆積状況（南西から）

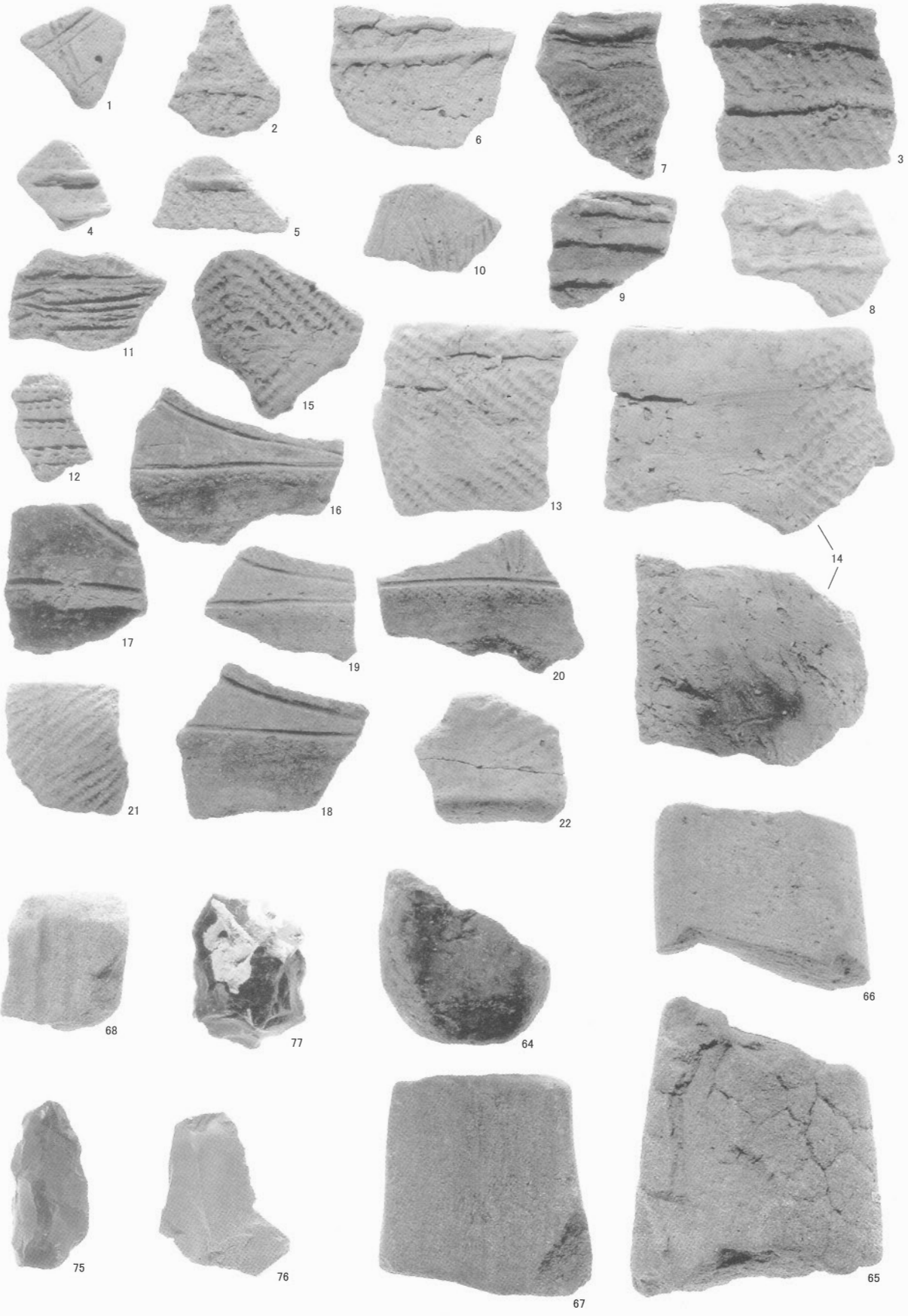
SX02（東から）

P11 土層断面（南から）

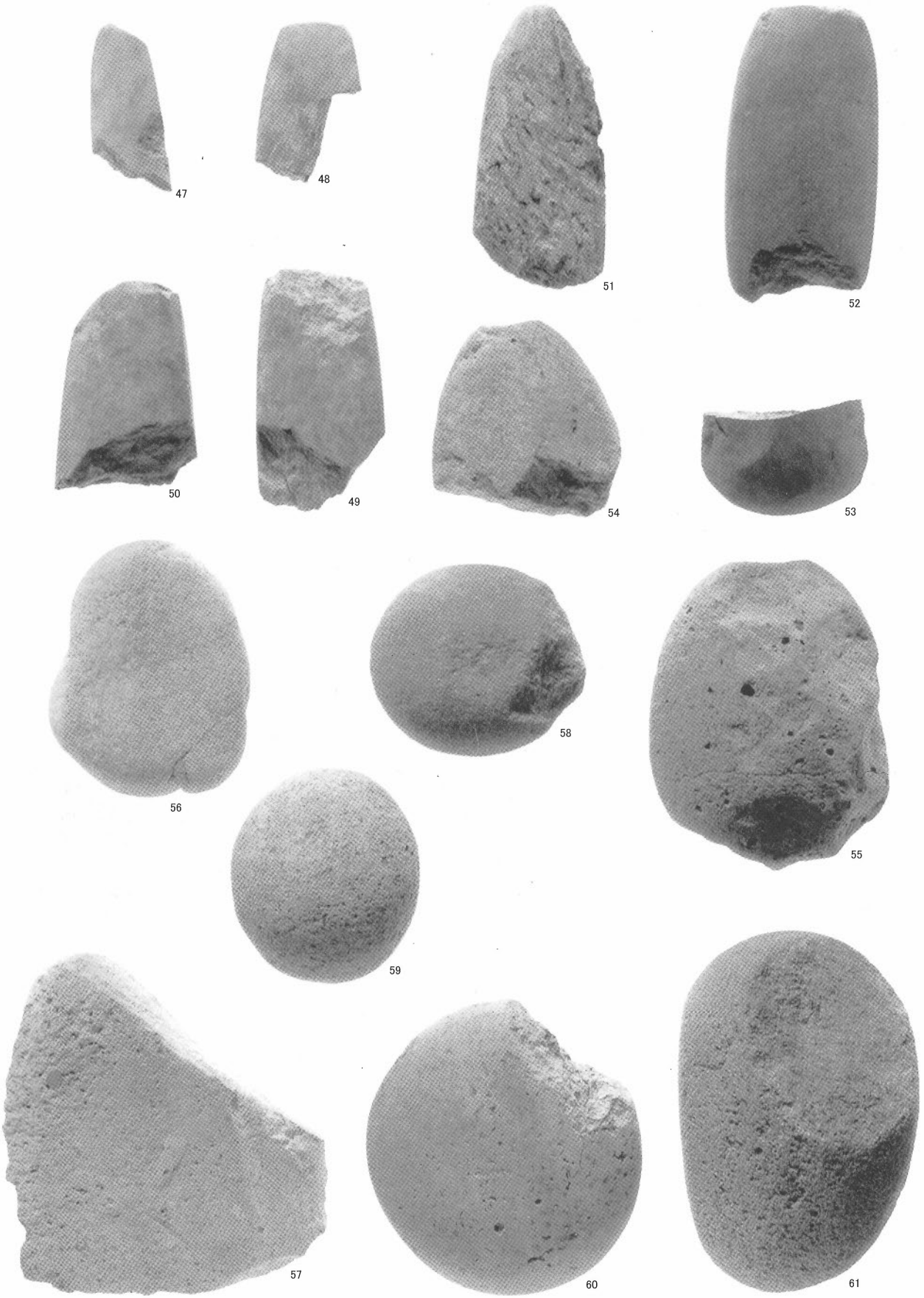
遺物出土状況（石器）

遺物出土状況（石器）

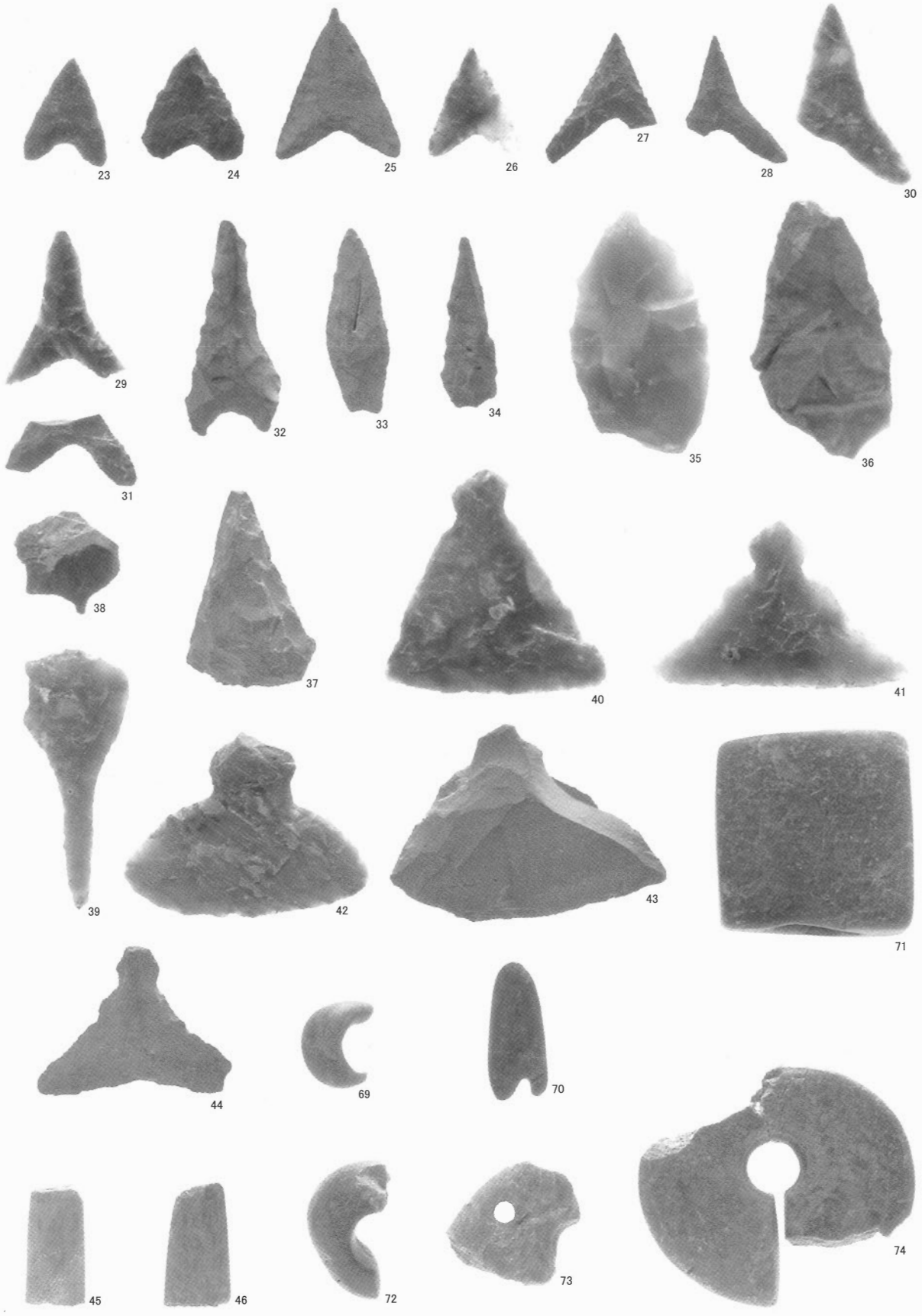
遺物出土状況（弥生土器）



縄文時代の土器・石器（約１／２）

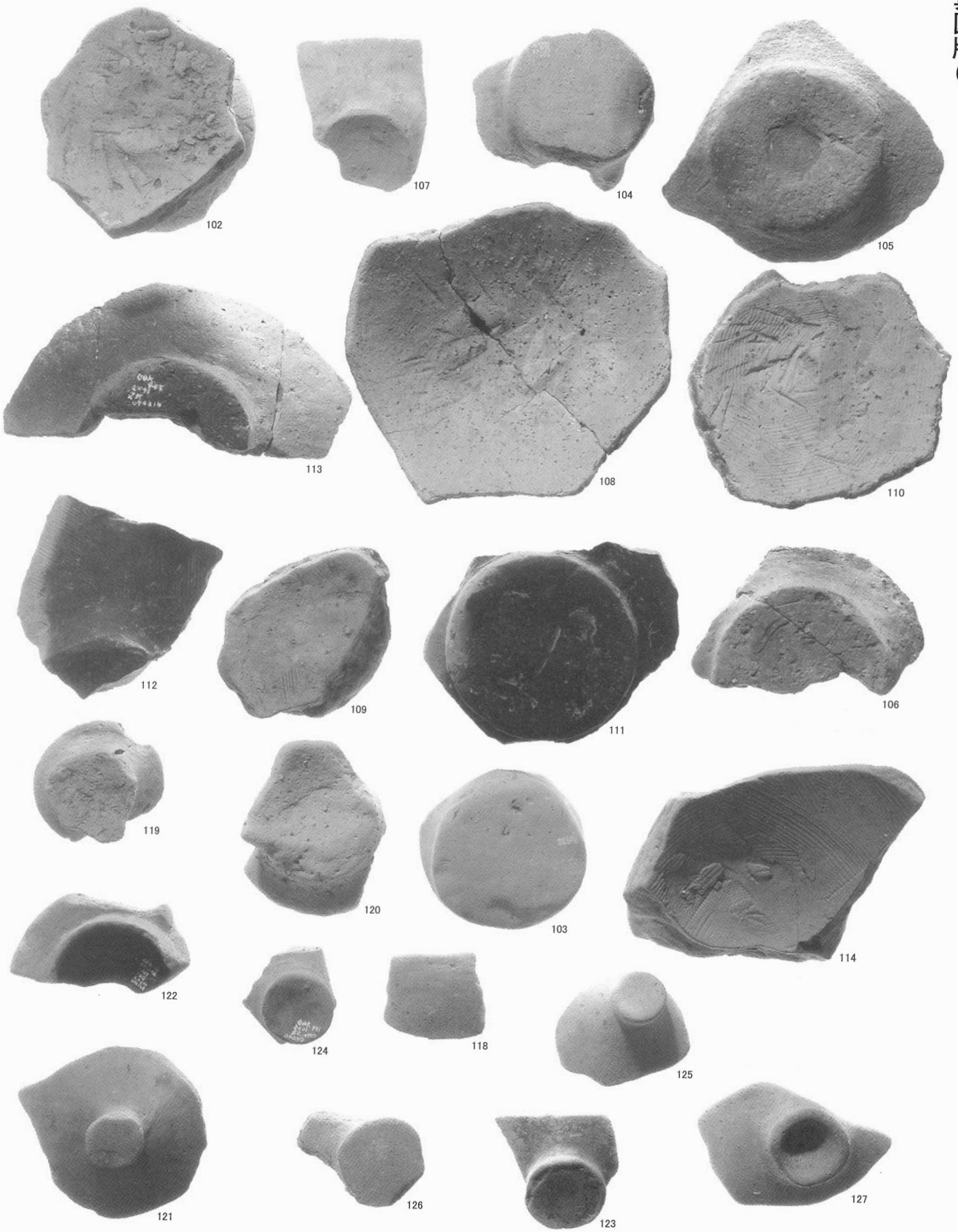


縄文時代の石器（約１／２）

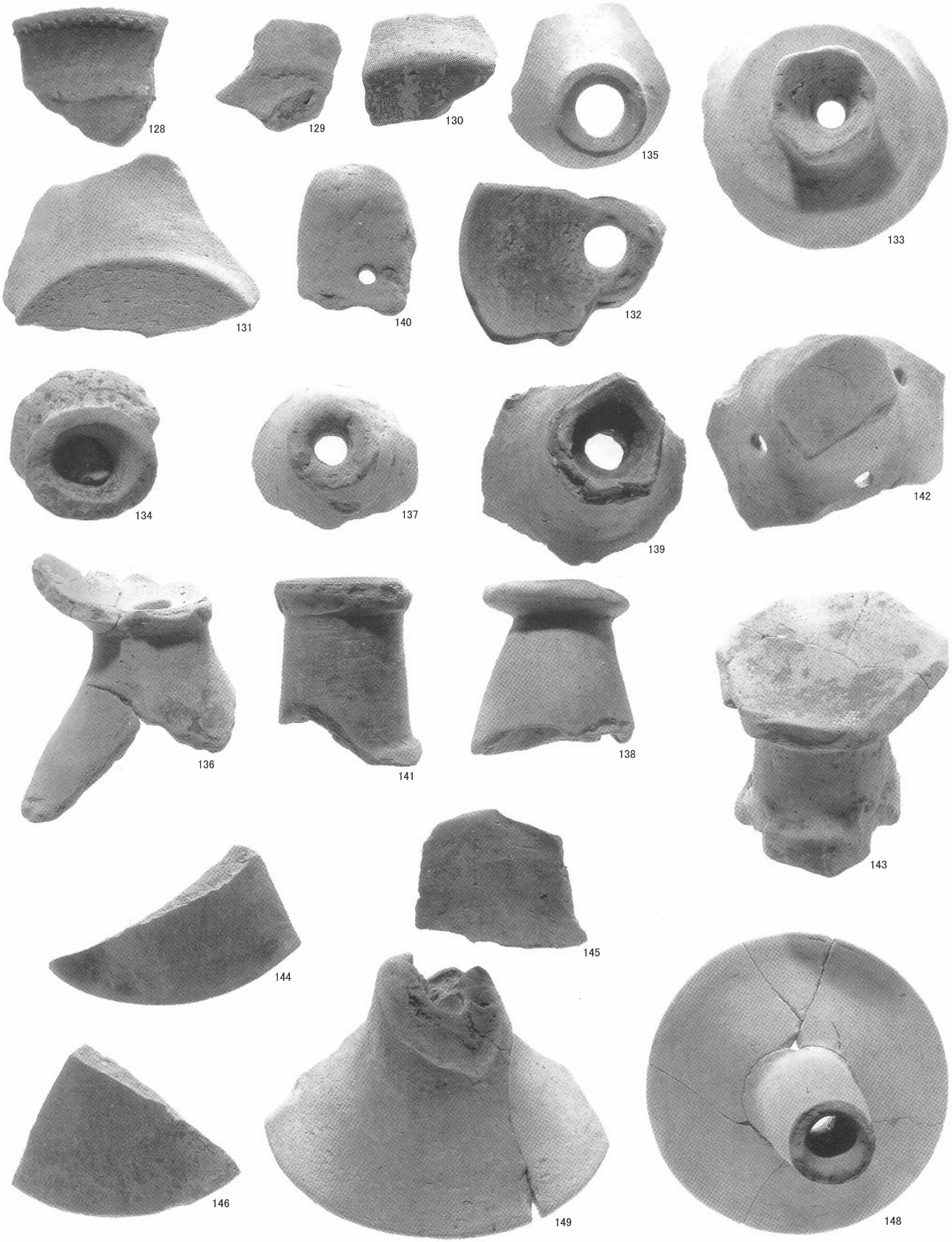

23
24
25
26
27
28
30
29
32
33
34
35
36
31
38
37
40
41
39
42
43
71
44
69
70
45
46
72
73
74

縄文時代の石器（約１／１）

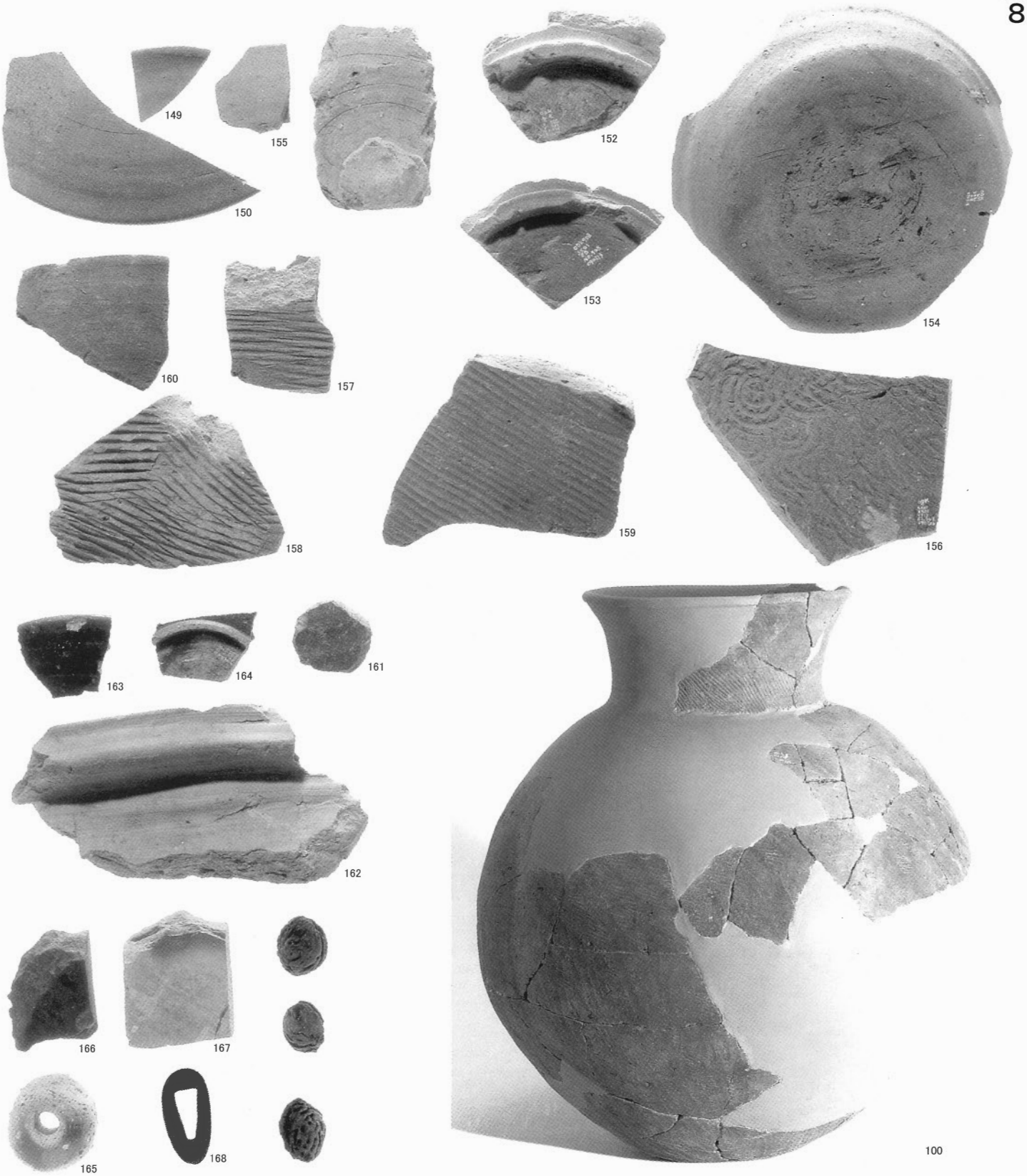
弥生～古墳時代の土器（約１／２）



弥生～古墳時代の土器（約１／２）



弥生～古墳時代の土器（約１／２）



弥生～江戸時代の遺物（100は約１／３，その他は約１／２）

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはっくつちょうさがいようじゅうに
書名	富山市内遺跡発掘調査概要Ⅻ
副書名	小竹貝塚
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	62
編著者名	鹿島昌也・納屋内高史・宮崎琢也
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター
所在地	〒930-0091 富山市愛宕町１－２－24　TEL 076－442－4246
発行年月日	西暦　2014年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
小竹貝塚（おだけかいづか）	富山市（とやまし）呉羽町北（くれはまちきた）	16201	0096	36度43分10秒	137度10分10秒	20090202～20090327	173.44	個人住宅建築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
小竹貝塚	集落跡	縄文時代	谷地形	縄文土器（前期・後期）、石器（石鏃・磨製石斧・石匙・石錐・石錘・凹石・石皿・擦石・叩石・玦状耳飾）、剥片	谷地形から多数の石器や剥片出土
		弥生時代	谷地形・竪穴建物、ピット	弥生土器	谷地形に多量の土器が廃棄
		古墳時代	谷地形	土師器	
		奈良～平安時代	谷地形	須恵器	
		鎌倉～室町時代	谷地形	珠洲焼、八尾焼、切羽	
		江戸時代	谷地形	越中瀬戸焼	
		時期不明		土製紡錘車、砥石、硯、種子、木製品	

要約

縄文時代前期～江戸時代の遺物が出土する谷地形が検出された。

縄文時代には、土坑やピットが検出された。遺物には各種石器やその未成品、剥片も多数見られ、近隣で石器製作を行っていたことが推測される。

谷地形から出土する遺物の大半は弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器で、赤彩されたものも数多くみられた。竪穴建物に伴う柱穴から弥生土器片が出土した。その他建物配置とはならないものの柱穴状のピットも複数検出された。

古代以降の遺物もわずかではあるが出土した。

縄文時代前期を主体とする小竹貝塚の縁辺部にありながらも近隣で様々な時代の営みがあったことをうかがうことができた。

富山市埋蔵文化財調査報告 62

富山市内遺跡発掘調査概要XII

―小竹貝塚―

発行日：平成 26（2014）年３月 31 日
発　行：富山市教育委員会
編　集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山市愛宕町 １ －２ －24
TEL：076-442-4246　Fax：076-442-5810
Email ： maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印　刷：中央印刷株式会社